

Title	日本北陸地域中国人留学生の社会資本構築に関する研究 一個人属性と異文化適応を中心に一
Author(s)	王, 宇航
Citation	
Issue Date	2025-03
Type	Thesis or Dissertation
Text version	author
URL	http://hdl.handle.net/10119/19716
Rights	
Description	Supervisor: KIM, Eunyoung, 先端科学技術研究科, 修士 (知識科学)

修士論文

日本北陸地域中国人留学生の社会資本構築に関する 研究

一個人属性と異文化適応を中心に一

WANG YUHANG

指導教員：KIM, Eunyoung

北陸先端科学技術大学院大学

先端科学技術研究科

（知識科学）

令和 7 年 3 月

要旨

日本北陸地域中国人留学生の社会資本構築に関する研究

一個人属性と異文化適応を中心に一

s2310016 WANG YUHAN

日本北陸地域に在居する中国人留学生の社会資本構築に影響を与える要因を明らかにすることを目的とする。本研究では、社会資本を人間関係や社会ネットワークから構成される概念と定義し、異なる文化的背景を持つ人々とのつながりにおいて重要な役割を果たすものと位置づけている。留学生にとって、社会資本は学業成功や生活の質の向上だけでなく、異文化適応や地域社会への統合にも大きな影響を及ぼす。

本研究の目的は二つに分けられる。一つ目は、中国人留学生の個人属性および異文化適応度が社会資本の形成に与える影響を解明することである。具体的には、性格や年齢、日本語能力といった個人属性、および心理的適応や社会文化適応といった異文化適応度が社会資本の強度にどのように関係するかを分析する。二つ目は、社会資本構築における異文化コミュニケーションの困難点を明らかにし、適応過程における障害や促進要因を特定することである。

アンケート調査および半構造インタビューを通じてデータを収集し、異文化適応度を測定するスケールを活用した。分析の結果、社会資本の構築は個人属性や異文化適応度と部分的に関連があることが示された。個人属性の中では、性格の明るさだけが社会資本の強度を左右する要因であると確認された。異文化適応においては、抑うつ度が社会資本の強度に影響を及ぼす要因であることが判明し、社会文化適応度は近似有意な結果を示しており、今後の研究でさらなる検証が求められる。半構造インタビューの結果からは、社会資本構築を阻害する要因として、言語能力の不足、社会的支援の不足、文化的な相違と適応の難しさ、地理的な制約や移動手段の不足が挙げられた。一方で、促進要因としては、積極性、多文化的なイベントや活動への積極的な参加、明確な目標を持つ活動への参加、さらに家族や既存の友人関係による心理的な安定が重要であることが示唆された。

以上の結果から、留学生が日本社会に積極的に参加することが、社会資本の構築を促進する重要な要因であると考えられる。そのためには、教育的支援の充実や社会ネットワー

ク環境の整備が求められると同時に、留学生を受け入れる日本社会の環境改善も、多文化共生を進める上で不可欠である。

目次

第 1 章 序論	9
1-1 研究背景	9
1-2 研究目的と研究意義	10
1-3 論文の構成	11
第 2 章 先行研究の整理	12
2-1 社会資本理論の概要	12
2-1-1. 社会資本理論の発展	12
2-1-2. 社会資本の定義と分類	13
2-1-3. 社会資本の特性と機能	14
2-1-4. 社会資本の測定	16
2-2 異文化適応に関する研究	17
2-2-1 異文化適応の定義	17
2-2-2 留学生の異文化適応に関する研究	19
2-3 社会資本を通じた留学生の異文化適応に関する研究	20
第 3 章 研究内容与方法	21
3-1 アンケート調査	21
3-1-1 調査対象	21
3-1-2 調査内容	22
3-1-3 分析方法	25
3-2 半構造インタビュー	26
3-2-1 調査対象	26
3-2-2 調査内容	27
3-2-3 分析方法	27
第 4 章 研究結果	28
4-1 アンケート調査の結果	28

4-1-1 対象者の個人属性	30
4-1-2 個人属性と社会資本の関係	46
4-1-3 対象者の異文化適応度	70
4-1-4 異文化適応度と社会資本の関係	71
4-2 半構造インタビューの結果	73
4-2-1 対人関係の現状と課題	73
4-2-2 組織参加の現状と課題	75
4-2-3 異文化コミュニケーションの困難点	76
4-2-4 将来の留学へのアドバイスと政策提言	78
第 5 章 考察	80
5-1 社会資本形成を促進する要因	80
5-2 社会資本形成を阻害する要因	81
第 6 章 結論	82
6-1 研究のまとめ	82
6-1-1 教育および政策の提言	84
6-2 今後の研究課題	85
参考文献	87
付録 1 アンケート質問票	90
付録 2 インタビュー質問内容	108

図目次

- 図 4-1 統計内容-性別統計
- 図 4-2 統計内容-年齢統計
- 図 4-3 統計内容-出身地統計
- 図 4-4 統計内容-性格統計
- 図 4-5 統計内容-在日年数統計
- 図 4-6 統計内容-身分統計
- 図 4-7 統計内容-来日前仕事経験統計
- 図 4-8 統計内容-専門統計
- 図 4-9 統計内容-日本についての事前熟知度統計
- 図 4-10 統計内容-大学についての事前熟知度統計
- 図 4-11 統計内容-来日前の日本語能力統計
- 図 4-12 統計内容-現在の日本語能力統計
- 図 4-13 統計内容-留学形態統計
- 図 4-14 統計内容-日本人恋人統計
- 図 4-15 統計内容-バイト時間数統計
- 図 4-16 統計内容-固定交際の日本人統計
- 図 4-17 統計内容-一人っ子統計
- 図 4-18 統計内容-日本以外の留学経験統計
- 図 4-19 統計内容-好きな日本芸能人統計
- 図 4-20 統計内容-社会アプリの使用頻度統計
- 図 4-21 異文化適応統計-抑うつ状態
- 図 4-22 異文化適応統計-社会文化適応状態

表目次

表 3-1	アンケート回収結果
表 4-1	性別報告書 1
表 4-2	性別分散分析表 1
表 4-3	性別報告書 2
表 4-4	性別分散分析表 2
表 4-5	年齢報告書 1
表 4-6	年齢分散分析表 1
表 4-7	年齢報告書 2
表 4-8	年齢分散分析表 2
表 4-9	出身地報告書 1
表 4-10	出身地分散分析表 1
表 4-11	出身地報告書 2
表 4-12	出身地分散分析表 2
表 4-13	性格報告書 1
表 4-14	性格分散分析表 1
表 4-15	性格報告書 2
表 4-16	性格分散分析表 2
表 4-17	在日年数報告書 1
表 4-18	在日年数分散分析表 1
表 4-19	在日年数報告書 2
表 4-20	在日年数分散分析表 2
表 4-21	性格分散分析表 2
表 4-22	性格分散分析表 2
表 4-23	性格分散分析表 2
表 4-24	性格分散分析表 2
表 4-25	仕事経験報告書 1

表 4-26	仕事経験分散分析表 1
表 4-27	仕事経験報告書 2
表 4-28	仕事経験分散分析表 2
表 4-29	出身地多重回帰分析表
表 4-30	性格相関性分析表
表 4-31	在日年数相関性分析表
表 4-32	学歴多重回帰分析表
表 4-33	専門多重回帰分析表
表 4-34	日本についての事前熟知度多重回帰分析表
表 4-35	大学についての事前熟知度多重回帰分析表
表 4-36	来日前の日本語能力多重回帰分析表
表 4-37	現在の日本語能力多重回帰分析表
表 4-38	留学形態多重回帰分析表
表 4-39	バイト時間数多重回帰分析表
表 4-40	固定的交際の日本人相関性分析表
表 4-41	社会アプリ使用頻度多重回帰分析表
表 4-42	抑うつ状態相関性分析表
表 4-43	社会文化適応状態相関性分析表
表 4-44	対人関係テーマ分析表
表 4-45	組織参加テーマ分析表
表 4-46	異文化コミュニケーションテーマ分析表
表 4-47	アドバイスと政策提言テーマ分析表

第1章 序論

1-1 研究背景

新型コロナウイルス感染症のパンデミックが収束した後、日本政府は段階的に留学生の入国政策を再開した。2020年前後に一時停止していた留学生の入国は現在では完全に解除され、留学生の受け入れ数は2019年以前の増加傾向に戻っている。この中で、中国人留学生は日本における留学生全体の中で大きな割合を占める存在であり、その数は増加し続けている。この現象は、日本国内における留学生政策や中国国内における日本留学の人気の高まりを反映したものである。また、中国国内における経済状況の悪化や大学卒業生の就職難も、日本留学を選ぶ学生が増加する一因となっている。

東京や大阪といった国際的な大都市は、充実した生活環境、優れた教育資源、多様な文化的背景が整備されているため、多くの中国人留学生が選ぶ主要な留学先となっている。これらの都市は利便性が高く、異文化適応のハードルが比較的低い点が留学生にとっての魅力である。しかしながら、厚生労働省のデータによれば、大都市以外の地方都市や地域にも多くの留学生が受け入れられていることが明らかになっている。たとえば、石川県、広島県、岡山県など、地域性の強い地方都市も多くの留学生を迎え入れている状況にある。

特に北陸地域では近年、中国人留学生の受け入れが増加している。しかし、この地域における外国人の割合は総人口の1%にも満たない状況であり、異文化間の交流や適応が十分に進んでいない可能性がある。このような環境において、中国人留学生がどのように日本社会に適応し、地域社会に積極的に参加するのか、あるいはアパートに引きこもり、学位取得のみを目的として帰国してしまうのかという課題が浮き彫りになっている。北陸地域特有の社会構造や文化的背景が、留学生の社会資本形成や異文化適応に大きな影響を与えていると考えられる。

社会資本理論は20世紀に誕生し、医学、教育学、心理学など多岐にわたる分野に新たな研究視角を提供してきた。特に近年では、留学生の異文化適応やソーシャルメディアを通じた人間関係の形成に関する研究にも社会資本の視点が用いられるようになってきている。本研究は、この社会資本の視点を基盤とし、北陸地域における中国人留学生の適応過程や社会資本形成に影響を与える要因を解明することを目指している。さらに、本研究を通じて、

未来の中国人留学生がより良い教育効果を得られる環境づくりに貢献することを期待している。

1-2 研究目的と研究意義

本研究は、日本北陸地域に在学する中国人留学生が日本で構築する社会資本に影響を与える個人特性やその他の要因を明らかにすることを目的とする。特に、留学生が社会資本を形成する過程で、どのような要因が良い影響を及ぼし、どのような要因が悪い影響を及ぼすのかを探求する。さらに、SR01 の分析においては、言語の壁のない中国人同士の交際を対象から除外し、中国人との社会資本と日本人との社会資本を区別して研究を行う。

本研究では、北陸地域で学ぶ中国人留学生が、日本社会でより良い形で社会資本を積み上げられるよう支援することを目指す。具体的には、日本語能力の向上や日本文化の理解を深めるとともに、日本国内で社会への参加、就職、進学といった目標達成を促進するための具体的な提言を行う。

本研究の具体的な研究目標は以下の通りである：

MR0：中国人留学生が社会資本を構築する際に影響を与える要因の探究。

SR01：個人属性と異文化適応が社会資本に与える影響の分析。

SR01-1：中国人との社会資本の強度に影響を与える要因の分析。

SR01-2：日本人との社会資本の強度に影響を与える要因の分析。

SR02：異文化コミュニケーションにおける困難が社会資本の構築に与える影響の探究。

社会資本理論は 20 世紀に誕生し、医学、教育学、心理学など多岐にわたる分野で新しい研究視角を提供してきた。近年では、留学生の異文化適応やソーシャルメディアを通じたネットワーク形成に関する研究にも応用されている。また、中国国内においても、中東地域からの外国人留学生を対象とした社会資本に関する研究が政策の影響を受けて盛んに行われている。しかし、日本における中国人留学生を対象とした研究では、異文化適応や一部のソーシャルチャネルに焦点を当てた研究が多い一方で、社会資本の視点からの研究はほとんど見られない。

さらに、日本国内の地域差に着目した場合、北陸地域における中国人留学生の研究はほとんど行われていない。東京や大阪のような国際都市では外国人人口が総人口の 10～20% を占めるのに対し、北陸地域では 1%未満にとどまる。このように、同じ日本国内であって

も、都市規模や外国人比率によって留学生が構築できる社会資本は大きく異なると考えられる。本研究は、北陸地域という特有の社会文化的背景における中国人留学生の社会資本形成に関する空白を埋めることを目指すものである。

本研究の成果は、中国人留学生が北陸地域でより良い教育効果を得るための具体的な支援方法を提示するだけでなく、地域社会における多文化共生の促進にも寄与することを期待している。また、本研究は、北陸地域の特性を踏まえた中国人留学生の社会資本形成に関する知見を提供することで、今後の学術研究や政策立案にも貢献することを目指している。

1-3 論文の構成

本論文は、中国人留学生が日本北陸地域で社会資本を構築する際に影響を与える要因を明らかにすることを目的とし、全6章で構成されている。

第1章 序論では、研究の背景と目的、そして意義について述べる。さらに、社会資本理論を用いた本研究の独自性を強調し、研究課題と論文全体の構成を簡潔に説明する。

第2章 先行研究の整理では、社会資本理論や留学生の異文化適応に関する既存研究を整理する。また、社会資本の定義と異文化適応の関係性についての議論を概観し、本研究がこれらの先行研究にどのように位置づけられるかを示す。

第3章 研究内容与方法では、本研究の調査設計と具体的な手法を説明する。アンケート調査や半構造インタビューを用いたデータ収集方法を紹介し、調査対象や分析方法についても述べる。

第4章 研究結果では、アンケート調査およびインタビュー調査の結果を報告する。データ分析を通じて、中国人留学生が社会資本を構築する際に影響を及ぼす個人属性や異文化適応の具体的な関係を明らかにする。

第5章 考察では、研究結果を基に社会資本の形成を促進する要因と阻害する要因について議論する。また、これらの要因が中国人留学生の異文化適応や日本社会での生活にどのように影響するかを考察する。

第6章 結論では、研究全体のまとめを行い、得られた知見を基に教育や政策的な提言を示す。最後に、本研究の限界と今後の研究課題について述べ、研究の発展可能性を示す。

最後は参考文献、アンケート質問票、半構造インタビューの質問を記載する。

第2章 先行研究の整理

2-1 社会資本理論の概要

2-1-1. 社会資本理論の発展

社会資本という概念は、20世紀初頭にフランスの社会学者 Bourdieu（1986）によって提唱された。彼は、社会資本を「制度化されたネットワークを通じて得られる資源」と定義し、これらの資源が社会関係に埋め込まれていることを強調した。Bourdieu は、社会資本が経済資本や文化資本と密接に関連し、これを補完する役割を果たすことを指摘し、特に階層社会における社会的不平等の維持に関与することを示唆した。

1980年代に入り、Coleman（1988）は、教育や家庭を対象とする研究を通じて社会資本の重要性を強調した。彼は、社会資本を「社会構造に埋め込まれた行動を促進する資源」と位置づけ、特に家族や地域社会における信頼や規範、相互扶助が、青少年の学業成功に与える影響を示した。Coleman の研究は、社会資本がどのように次世代の教育成果を左右するのかに焦点を当て、社会関係の強さが教育達成度に与える影響を実証した。

1990年代に入ると、Putnam（1995）は社会資本の研究を地域社会や政治学の分野に拡張した。彼は社会資本を「信頼、規範、ネットワークの集合体」と定義し、これらが集団行動を促進し、社会全体の効率を向上させると主張した。『Making Democracy Work』では、イタリアの地域比較を通じて、社会資本が民主主義の安定や経済発展に重要な役割を果たしていることを示した。この研究は、社会資本が国家や地域の社会的統合に及ぼす影響を示し、政策的観点からの活用の可能性を提示した。

一方、中国の社会学者 Lin（1999）は、社会資本理論を文化的背景に基づき拡張した。彼は、社会資本を「社会ネットワークに埋め込まれた資源」と定義し、特に中国社会における「人情」や「関係」文化の影響を考察した。Lin は、社会資本が文化的背景と密接に結びついていることを指摘し、個人レベルおよび社会レベルでの社会資本の動員方法に焦点を当てた。

2000年代以降、社会資本理論は教育、健康、心理学、デジタル社会など、様々な分野に応用されている。特に、社会資本が心理的健康や抑うつ症状の予防に寄与することが注目されている。謝ら（2023）は、大学生の抑うつ症状と社会資本の関係を分析し、社会資本

が豊富な学生ほど抑うつリスクが低く、心理的安定を維持しやすいことを示した。この研究は、社会資本が個人の精神的健康に与える積極的な影響を明確にし、社会的支援ネットワークの重要性を強調している。

2-1-2 社会資本の定義と分類

社会資本とは、個人または集団が社会ネットワークを通じて利用可能な資源の総体を指す。Bourdieu (1986) は、社会資本を「制度化されたネットワークを通じて得られる資源」と定義し、経済資本や文化資本との相互依存性を強調した。Coleman (1988) は、社会資本を「信頼、規範、相互扶助が行動を促進する社会構造に埋め込まれた資源」と位置付け、教育や地域コミュニティでの役割を明確化した。さらに、Putnam (1995) は、信頼、規範、ネットワークが社会的効率や協調行動を促進すると主張し、地域社会の発展における社会資本の重要性を示した。一方、Lin (1999) は、社会資本を「社会ネットワークに埋め込まれた資源」であり、弱い関係と強い関係が情報伝達や支援提供に与える影響を区別した。

社会資本の研究は、ハオと艾 (2013) によって、個人レベルと集団レベルという二つの視点から展開されている。以下に、それぞれの視点からの定義と特徴を述べる。

個人レベルの社会資本は、個人が自らの社会ネットワーク（家族、友人、同僚など）を通じて得られる資源を指す。Bourdieu (1986) は、個人が社会関係を活用して経済資本や文化資本を蓄積するプロセスに着目し、これを個人レベルの社会資本の本質として位置付けた。さらに、Coleman (1988) は、家族や地域社会における相互信頼や規範が、子どもの学業成果に与える影響を実証した。彼の研究では、親と教師のネットワークが子どもの教育環境を向上させる事例が示されている。崔と楼 (2019) によって、個人レベルの社会資本の一つの重要な特徴は、「弱い関係」の役割である。弱い関係は、新しい情報や視点を提供する上で効果的であり、特に異文化適応において重要である。留学生の場合、現地の友人や同僚との弱い関係が、生活情報の共有や新しい社会ネットワークの形成を促進する要因となる。

集団レベルの社会資本は、学校、地域社会、企業といった集団や組織を通じて形成される資源を指す。Putnam (1995) は、集団レベルの社会資本が地域社会の発展に不可欠であることを指摘し、これを「信頼、規範、ネットワークが公共財の管理や社会的統合に与える影響」として位置付けた。また、崔と楼 (2019) は、集団レベルの社会資本が社会統合

や協調行動を促進し、異文化環境においても個人の適応を支える重要な要素であることを強調している。林（2020）は集団レベルの社会資本には、組織内の協力、リーダーシップ、文化的規範といった要素が含まれる。留学生にとって、大学内のサポート体制（例：国際交流プログラム、留学生向けセミナー）や地域社会での多文化交流イベントが、社会資本形成の重要なプラットフォームとなる。

本研究は、Lin（1999）の社会ネットワーク理論を基盤とし、個人レベルでの社会資本の動員が異文化適応に与える影響に焦点を当てる。特に、強い関係（strong ties）と弱い関係（weak ties）が留学生の適応過程にどのように機能するのかを分析する点で、Linの視点を重視する。また、崔・楼（2019）の研究を参考にし、社会資本の異文化環境における役割を考察することで、留学生の社会関係の特徴とその適応メカニズムを明らかにすることを目的とする。本研究は、留学生がどのような社会ネットワークを構築し、それが異文化適応にどのような影響を及ぼすのかを解明し、実際の支援策の立案にも寄与することを目指す。

2-1-3 社会資本の特性と機能

社会資本は、個人や集団が社会ネットワークを通じて利用可能な資源を指し、その特性と機能は多様であり、個人および社会全体に広範な影響を与える。その特性を理解することは、社会資本がどのように機能し、どのように社会発展に寄与するかを考える上で重要である。

まず、社会資本の特性として最も基本的なのは埋め込み性である。Bourdieu（1986）は、社会資本が社会関係ネットワークに埋め込まれており、これを通じて個人が経済資本や文化資本を獲得できると指摘している。また、Lin（2001）は、社会資本は直接的な人間関係に限定されず、ネットワーク構造や質を通じて動員可能な資源も含まれると述べている。この埋め込み性によって、信頼と協力を通じた資源の共有と利用が可能になる。これらの特性は、社会資本が個人および集団の利益にどのように貢献するかを説明するための基盤となる。

次に、動態性が挙げられる。この特性は、社会資本が固定的なものではなく、時間や社会環境の変化に応じてその形態や量が変動する点を示している。Putnam（1993）は、社会

資本の蓄積と消費が動的なプロセスであると述べ、積極的な社会環境では、信頼や規範が拡散し、社会資本が強化されると指摘している。また、宋（2021）の研究では、社会資本が欠如した場合、信頼の低下が社会的協力の崩壊につながる可能性があることを示している。これらの視点から、社会資本の動態性は、社会環境や個人行動がどのように社会資本に影響を与えるかを考える際に重要な要素となる。

さらに、社会資本の特性として多層性および文化的相対性も重要である。個人レベルの社会資本は、家族や友人といった親密なネットワークから得られる支援を指し、集団レベルの社会資本は、コミュニティや組織の凝集性や共通の価値観に基づく（Coleman、1988；辺、2020）。林（2020）は、中国社会の「人情」文化や「関係」文化が社会資本の形成と運用において独特の役割を果たしていると述べ、西洋社会の普遍的な信頼と対照的な特性を強調している。これらの文化的背景に基づく特性は、社会資本の形成プロセスが地域や文化によってどのように異なるかを示している。

社会資本の機能についても多くの研究がなされており、その中でもまず挙げられるのは情報伝達と資源共有である。Putnam（1995）は、社会資本の持つネットワークが、個人や集団に新しい情報や資源へのアクセスを提供し、意思決定の効率を高めると指摘している。また、Lin（1999）は、社会ネットワークを通じた資源共有のプロセスを動員可能性という概念で説明し、社会資本が個人の生活の質向上や経済活動の成功にどのように寄与するかを理論化した。このように、情報伝達と資源共有の機能は、社会資本が具体的にどのように役立つかを示す代表的な例である。

次に、心理的支援と健康の向上が挙げられる。謝ら（2023）の研究では、社会資本が豊富な大学生ほど抑うつリスクが低く、心理的安定を維持しやすいことが示されている。社会資本は、感情的な支援やストレス緩和を通じて、特に新しい環境で生活する留学生にとって重要な役割を果たしている。この視点は、留学生の心理的健康を支える社会資本の役割を考える上で極めて重要である。

また、社会的統合と異文化適応の促進も社会資本の重要な機能である。Putnam（1995）は、信頼や規範を通じて集団行動を促進し、社会統合の基盤となると述べている。留学生が現地で社会ネットワークを構築することは、異文化適応や地域社会との関係構築において重要な鍵となる。

最後に、教育および職業発展の支援や、地域社会の構築と社会統治における機能も挙げられる。Coleman（1988）の研究では、家庭と学校の協力関係が子どもの学業成果を向上させることが示されている。また、職場における同僚や上司との関係がキャリア発展において重要な役割を果たしている。さらに、辺（2020）は、社会資本が住民間の信頼や絆を強化し、コミュニティ全体の社会的結束力を向上させることを示している。また、宋（2020）の研究では、公共衛生分野において社会資本が協力体制を通じて健康結果の改善に寄与することが明らかにされている。

このように、社会資本はその特性と機能を通じて、個人および集団、さらには社会全体の発展に多大な貢献をしている。その重要性は、教育、健康、異文化適応、地域社会の発展など、多岐にわたる分野で明確に示されている。

2-1-4 社会資本の測定

崔、楼（2019）によって、社会資本はその多次元性と抽象的性質から、測定が非常に複雑であり、研究者の間で統一した基準が存在しない。社会資本の測定は、個人社会資本と集団社会資本の二つの視点で行われ、それぞれの焦点と方法に違いが見られる。以下では、代表的な測定方法と社会資本測定の枠組みについて説明する。

個人社会資本の測定は、主に個人が持つ社会ネットワークの規模、特性、そして利用可能性に焦点を当てている。以下は代表的な測定方法である：

提名生成法（Name Generator）：

提名生成法は、個人が相談する相手や支援を受ける相手を列挙させることで、その社会ネットワークの構造を把握する方法である。Burt（1984）は、この方法が特に個人が持つ社会資本の広がりや質を測定する際に有効であると指摘している。例えば、「困ったときに誰に相談しますか？」といった質問を行い、列挙された人々との関係の強度や親密度を調べることができる。

位置生成法（Position Generator）：

位置生成法は、調査対象者がどのような社会的地位や職業の人々と接触しているかを調査する方法であり、ネットワークの多様性やリソースの広がりを測定するのに適している。Lin（1999）は、社会資本が持つ経済的、文化的リソースの階層的分布を評価するため、この方法が有効であると述べている。

リソース生成法（Resource Generator）：

リソース生成法は、調査対象者が社会ネットワークを通じて実際に利用可能な具体的資源を明らかにする方法である。Putnam（1995）は、この方法について「職業紹介を受けた経験はありますか？」や「金銭的支援を受けられる相手はいますか？」といった具体的な質問を含むと説明している。

集団社会資本の測定は、個人のネットワークに基づく測定とは異なり、信頼、規範、社会的結束力、そして公共参与などの要素に注目している。

Putnam（1995）は、社会資本の集団的な側面を測定する際、地域社会やコミュニティ間の信頼を重要な指標として挙げている。社会資本が豊富な集団ほど、住民の社会活動やボランティア活動への参加率が高いとされる。Lochner ら（1999）は、社会資本を測定する際に、集団内での公共参与の水準を評価すべきと指摘している。Harpham ら（2002）は、社会資本を測定する際、住民間の絆や帰属意識を重要な要素として挙げている。これにより、コミュニティ全体の凝集性や協力体制を把握することができる。

社会資本の測定に関しては、さまざまな測定ツールが開発されている。

世界銀行によって開発された SCAT（Social Capital Assessment Tool）は、社会資本を測定するための初期の包括的ツールであり、構造的な社会資本と認知的な社会資本を評価するための項目が含まれる。

SC-IQ（Social Capital Integrated Questionnaire）は、Grootaert（2003）により構築、社会資本の決定要因、影響、そして社会資本そのものを測定する 6 つの次元から構成される包括的な質問票である。

簡版 SCAT（SASCAT）は、Harpham（2006）により簡易な質問票を用いて、組織参加、社会的支援、公共参与、信頼と凝集性などの項目を測定するツールである。

2-2 留学生の異文化適応に関する研究

2-2-1 異文化適応の定義

総合的に言うと、異文化適応とは、個人が自文化の枠組みを超え、新たな文化的背景を持つ環境において、心理的、社会的、文化的に適応しながら生活していく複雑な過程を指す。この適応は、単なる文化的受容を超えて、個人の価値観や行動、対人関係、そして全

体的な生活の質にまで及ぶ包括的な現象である。Lysgaard (1955) は「U字型カーブ理論」を通じて、異文化適応が単なる直線的プロセスではなく、適応の過程で高揚感、挫折感、安定という三段階を経ることを示した。特に、異文化環境に直面した初期には新鮮さや興奮が生じる。一方、次第に文化的摩擦や孤立感による適応の危機が訪れる。この理論は異文化適応の一般的な心理プロセスを可視化したものとして、後の研究の基盤となっている。

Gullahorn and Gullahorn (1963) は、この「U字型カーブ理論」をさらに発展させ、「W字型カーブ理論」を提唱した。この理論では、異文化適応のプロセスに帰国後の「リバースカルチャーショック」を含め、適応の循環的な特性を強調している。異文化環境において新しい文化を受け入れる際の心理的挑戦だけでなく、自文化に戻った際の再適応の難しさも説明しており、異文化適応が単なる一方向のプロセスではないことを示している。

Ward and Kennedy (1999) は異文化適応を「心理的適応」と「社会文化的適応」の二つの視点から定義した。このモデルは、異文化環境における情緒的な安定や心理的幸福感を指す心理的適応と、新しい文化環境での日常的な行動や社会的役割への習熟を指す社会文化的適応を区別している。心理的適応では、ストレスや不安への対処能力が重要視され、社会文化的適応では、言語能力や文化的知識、社交スキルが適応の成功要因となるとされる。この二分法は、異文化適応を多面的に分析するための有効な枠組みであり、多くの実証研究で採用されている。

さらに、Berry (1997) は、異文化適応を「統合」「同化」「分離」「辺縁化」の四つのスタイルに分類し、それぞれの適応方法が心理的負担や文化的ギャップに与える影響を明らかにした。例えば、「統合型」の適応では、個人が自文化と新しい文化の両方を受け入れ、双方の価値観を調和させることで、最も安定した適応状態を実現する。一方、「辺縁化型」の適応では、自文化と新しい文化の両方に対する疎外感が強まり、心理的負担が大きくなるとされる。この理論は、異文化適応の多様性とその心理的影響を理解する上で重要な視点を提供している。

しかし、高井 (1998) は、異文化適応に関する研究は対象や方法論の多様性により一貫した結果を得るのが困難であると指摘している。例えば、文化的背景や個人特性の違いが適応の成果に影響を及ぼし、結果の比較が難しいという問題が挙げられる。また、心理的適応と社会文化的適応の相互関係については未解明の部分も多く、さらに多角的なアプロ

一チが必要とされている。

以上のように、異文化適応は心理的、社会文化的、環境的要素が複雑に絡み合った現象である。本研究では、Ward and Kennedy (1999) が提唱した「心理的適応」と「社会文化的適応」の定義を基盤として、中国人留学生の異文化適応状態を統計する。心理的適応は、異文化環境での情緒的安定やストレス対処に焦点を当てる一方、社会文化的適応は、言語能力や現地の社会規範への習熟といった具体的な行動側面に注目する。この定義を活用することで、異文化適応の成功要因と障害要因をより具体的に明らかにすることを目指す。

2-2-2 留学生の異文化適応に関する研究

近年、留学生の異文化適応に関する研究は心理的適応と社会文化的適応という二つの側面から多角的に進められている。Ward と Kennedy (1999) は、心理的適応を精神的安定やストレスの緩和、社会文化的適応を新しい環境での行動スキルや文化規範の習熟と定義し、これらの二次元モデルが多くの研究で採用されている。この枠組みは、留学生が異文化環境で直面する多様な課題を明確化し、その適応の成功要因や阻害要因を理解する上で重要な理論的基盤を提供している。

来華留学生を対象とした研究では、社会的支援と心理的ストレスが異文化適応に与える影響が注目されている。陳ら (2024) の研究によると、感知される社会的支援が抑うつ感情の低減や心理的安定に寄与し、適応を促進する重要な要因となることが確認された。また、邓ら (2024) は、短動画プラットフォームなどのデジタルツールが社会文化的適応に与える影響を実証し、技術の可用性が新たな適応要因として機能する可能性を示唆している。このような研究は、現代のデジタル社会における異文化適応の新しい視点を提供している。

さらに、異文化適応における個人特性や文化的背景の影響も多くの研究で議論されている。例えば、孫 (2024) の研究では、ベトナムやタイ、アフリカ諸国からの留学生を対象に、文化距離や言語能力、対人スキルが社会文化的適応に与える影響を分析している。特に、文化距離が大きい場合には、適応プロセスにおいてより多くの社会的支援や文化的理解が必要となることが指摘されている。同様に、劉 (2016) は、日本の大学で働く外国人教師を対象に、個人の性格（外向性や柔軟性）と文化的知能が適応の成功にどのように寄与するかを明らかにした。

環境要因に関する研究では、学校や地域社会のサポート体制が適応を促進する鍵として挙げられている。徐と羅（2024）の研究によれば、留学生が異文化環境で直面する課題の多くは、受け入れ側の支援不足に起因していることが示されている。同様に、唐（2015）は、同胞間の支援ネットワークが心理的適応と社会文化的適応の両方を促進する重要な要素であると結論づけている。

近年の研究は、留学生の異文化適応を多様な視点から検討しており、心理的健康、社会文化的スキル、デジタル技術の活用、社会的支援ネットワークの構築など、さまざまな要因が相互に作用していることが明らかにされている。これらの知見は、異文化適応の理論を発展させるとともに、実践的な支援策の構築にも寄与している。本研究では、これらの既存研究を踏まえ、北陸地域における中国人留学生を対象に、異文化適応が社会資本に対しての影響を探求し、解明を目指す。

2-3 社会資本を通じた留学生の異文化適応に関する研究

近年、留学生の異文化適応における社会資本の役割について、多くの研究が進められている。これらの研究は、社会資本が留学生の心理的安定や社会文化的適応をどのように支えるかに焦点を当てており、それぞれの視点から貴重な知見を提供している。

まず、社会資本が異文化適応に与える具体的な影響について、余（2021）は「一带一路」沿線国から中国に留学する学生を対象に、信頼やネットワークの質が心理的適応や学業適応に寄与することを明らかにした。この研究では、特に現地の友人や教師との関係が適応を促進する重要な要因であり、一方で社会資本が乏しい場合、孤立感や文化的摩擦が適応の障害となることも示されている。劉ら（2023）の研究は、デジタル社会における社会資本の役割に注目し、東盟からの留学生がソーシャルメディアを活用して異文化適応を進めるプロセスを分析した。この研究では、ソーシャルメディアが物理的距離を超えた社会ネットワークを構築し、留学生が現地の文化や社会規範を理解するための情報源として機能していることを示している。また、デジタルプラットフォームを通じた信頼の構築が、心理的安定と社会的つながりの強化に寄与している点が特筆される。

また、文化距離と社会資本の関係について、郭（2013）の研究が挙げられる。この研究では、文化距離が大きい場合、適応の難度が増す一方で、強い社会資本がその影響を緩和する役割を果たすことが明らかにされた。特に、文化認知が高い個人ほど、社会ネットワ

ークを通じて異文化適応を進めやすく、現地文化への興味と理解が社会文化的適応を大きく促進するという結果が得られている。「家族関係」や「地域社会のサポート」といった環境要因に注目した研究も進んでいる。例えば、陳（2020）は中国在英留学生を対象に、家庭内の信頼や支援が留学生の心理的安定を支える基盤となっていることを指摘している。また、張（2023）の研究では、ソーシャルメディアが新しい環境での社会ネットワーク構築を支援し、適応を促進する重要なプラットフォームとして機能している点が示唆されている。

これらの研究全体を通じて、社会資本が留学生の異文化適応において不可欠な役割を果たしていることが明らかになった。信頼、ネットワークの強度と多様性、相互扶助の文化が心理的適応と社会文化的適応を促進する重要な要素として機能している。また、留学生が個人として持つ性格特性や、ソーシャルメディアなどの技術が新たな社会資本の形成に寄与している点も、現代的な研究課題として浮き彫りになっている。

本研究では、これらの既存研究を基盤に、北陸地域における中国人留学生を対象に、社会資本を構築際に、異文化適応の程度がどのような影響があるかを検討する。より実践的な支援策の提言を目指す。

第3章 研究内容と方法

3-1 アンケート調査

3-1-1 調査対象

本研究では、日本の北陸地域に所在する大学に在学している中国人留学生を対象に、アンケート調査を実施した。調査対象者は120名であり、そのうち111名から回答を得た。回収した回答については、データの正確性を確保するために精査を行った。具体的には、注意力を測定するために設けた2問の注意力テスト問題（例：「特定の選択肢を選択してください」という指示に従う問題）を含んでおり、いずれか1問でも誤答があった場合、その回答は無効と判断した。また、回答時間が平均回答時間（約12分）より5分以上短い場合も同様に無効とした。これらの基準に基づき、計7件の回答を除外した結果、最終的に有効回答数は104件となった。有効回収率は86.67%である。

なお、注意力テスト問題を設けた理由は、調査対象者が設問を適切に読み取り、意図的または非意図的な不注意による回答を避けるためである。このプロセスにより、得られたデータの信頼性および妥当性を確保し、研究目的に即した分析を行うことが可能となった。

	依頼	回収	未回収	有効	無効	回収有効	回収無効
数量	120	111	9	104	7	104	7
比率	100%	92.5%	7.5%	86.67%	5.83%	93.69%	6.31%

表 3-1 アンケート回収結果

3-1-2 調査内容

本調査のアンケートは、全 98 問で構成されており、96 問の質問項目と 2 問の注意力テスト問題を含んでいる。質問項目は「個人属性」「異文化適応」「社会資本」の三つの部分に分かれている。

第一部分の個人属性に関する質問では、中国人留学生の基本的な個人属性に関する情報を収集することを目的としている。この部分は、「性別」「年齢」「在学中の大学」「出身地（省単位）」「性格」「日本滞在期間」「現在の身分（学部生、別科生、修士課程生など）」「来日前の職業経験」「専攻」「来日前の日本に関する知識」「来日前の在学予定大学に関する知識」「来日前の日本語能力」「現在の日本語能力」「留学形態（私費留学生、公費留学生）」「日本人の恋人の有無」「アルバイトの平均週勤務時間」「日本での固定的な交際関係にある日本人の友人の人数」「兄弟姉妹の有無」「日本のソーシャルメディア（LINE、Instagram など）の利用頻度」といった計 21 問で構成されている。

第二部分では、Ward and Kennedy (1999) が提唱した「心理的適応」と「社会文化的適応」の定義に基づき、異文化適応を二つの側面から評価した。計 53 問である。

心理的適応の測定には、W. W. K. Zung (1965) が作成した自己評価式抑うつ性尺度 (Self-Rating Depression Scale、以下 SDS と表記する) を採用した。SDS は、抑うつ状態を評価するために設計された 20 項目の質問で構成され、次のような抑うつ状態因子を含んでいる：

「憂うつ」「抑うつ」「悲哀」「日内変動」「啼泣」「睡眠」「食欲」「性欲」「体重

減少」「便秘」「心悸亢進」「疲労」「混乱」「精神運動性減退」「精神運動性興奮」「希望のなさ」「焦燥」「不決断」「自己過小評価」「空虚」「自殺念慮」「不満足」

回答は、「めったにない」「時々」「しばしば」「いつも」の4件法で評価され、得点化される。

ただし、本研究では、対象となる学生のほとんどが未婚であること、また「性欲」に関する項目がプライバシーに関わる可能性を考慮し、この項目を除外した。そのため、本研究では SDS の 19 項目を採用している。1 問の注意力テスト問題を含めて、計 20 問である。

また、この 19+1 項目は、回答者が回答パターンに気付かないよう設計されており、10 項目を陽性項目、9 項目を陰性項目として分類した。第 9 問は注意力テスト問題として設定しており、得点計算には含まれていない。具体的な得点付けは陽性項目（質問 1、3、4、6、7、8、10、13、15、19、20）：左から右の順で 1 点、2 点、3 点、4 点を付与する。陰性項目（質問 2、5、11、12、14、16、17、18）：右から左の順で 1 点、2 点、3 点、4 点を付与する。各質問の得点を合計し、「抑うつ得点」として評価する。この得点が高いほど、抑うつの程度が強く、心理的適応が困難であることを示す。SDS の得点範囲は 19 点から 76 点であり、最低得点は 19 点、最高得点は 76 点となる。

日本では、福田らにより SDS が翻訳され、以下の基準で抑うつ状態の判定が行われている：

40 点未満：抑うつ状態はほとんどなし

40～49 点：軽度の抑うつ性あり

50～54 点：中等度の抑うつ性あり

55 点以上：うつ病

本研究では、SDS の 19 項目を使用しているため、「抑うつ係数」を用いて心理的適応状態を評価した。抑うつ係数の計算式は以下の通りである：

抑うつ係数 = 合計得点 ÷ 満点（76 点）

この抑うつ係数に基づき、福田らの基準を以下のように換算した：

抑うつ係数 < 0.50：抑うつ状態はほとんどなし

0.50 ≤ 抑うつ係数 < 0.625：軽度の抑うつ性あり

0.625 ≤ 抑うつ係数 < 0.688：中等度の抑うつ性あり

抑うつ係数 ≥ 0.688 : うつ病

心理的適応は、異文化環境における留学生のストレスレベルや精神的健康状態を示す重要な指標であり、本研究では中国人留学生が日本での生活にどのように適応しているかを明らかにするために評価を行った。

社会文化的適応の測定には、姚（2013）が設計した 32 項目から成る社会文化適応評価尺度を使用した。この尺度は、Furnham と Bochner (1982) の Social Situation Questionnaire、Ward と Kennedy (1999) の 41 項目からなる社会文化適応評価項目表 (the Sociocultural Adaptation Scale) などを基に作成されたものであり、内容的妥当性が高いと言える。また、1 問の注意力テスト問題を含めて、計 33 問である。

この尺度は、人間関係、物質的生活環境（気候、住宅、飲食、交通）、および日本文化の理解（日本人の風俗や価値観、政治など）の 3 つの領域に焦点を当てて構成されている。回答は「まったく困難ではない」「少し困難」「まあまあ困難」「かなり困難」「非常に困難」の五件法で行われ、左から右に 1 点、2 点、3 点、4 点、5 点の評価点を付与するように設計されている。

32 項目の得点を合計し、「社会文化適応得点」として評価する。この得点範囲は 32 点から 160 点までであり、得点が高いほど社会文化適応状況が困難であることを示す。また、難度係数を以下の式で算出し、適応状況を分類した：

$$\text{難度係数} = \text{合計得点} \div \text{満点 (160 点)}$$

難度係数に基づく分類は以下の通りである：

難度係数 ≤ 0.20 : まったく困難ではない

$0.20 < \text{難度係数} \leq 0.40$: 少し困難

$0.40 < \text{難度係数} \leq 0.60$: まあまあ困難

$0.60 < \text{難度係数} \leq 0.80$: かなり困難

$0.80 < \text{難度係数} \leq 1.00$: 非常に困難

本研究で採用した社会文化適応評価尺度は、留学生が日本の生活環境や文化にどの程度適応しているかを定量的に把握することを目的としており、異文化適応の実態を明らかにする重要なツールである。

本研究の第三部分では、社会資本の強度を評価することを目的とし、楊と張（2010）が

中国人を対象に設計した社会資本評価表を用いた。この評価表は、欧米諸国で発展してきた社会資本測定ツールを参考にしつつ、中国文化の特性を反映し、特に社会ネットワーク構造（親戚や友人の数）と社会的価値観（信頼、互助関係）の2つの主要な因子に焦点を当てて設計されたものである。これにより、中国人社会における人間関係や社会的ネットワークの独自性を考慮しつつ、社会資本の構成要素を的確に測定することが可能となっている。

本調査では、中国人留学生が日本において形成した社会資本を測定するため、中国人の友人関係と日本人の友人関係の2つに分けて、それぞれ意識して回答する形式を採用した。同一内容の質問を用いて、各12問、計24問を用意した。このように2つに分けた理由は、留学生が日本人の友人と中国人の友人を区別しにくい場合があり、その結果、全体の社会資本強度が過大評価される可能性があるためである。この分割により、真に日本社会で良好なネットワークを構築している場合と、中国人の友人関係に依存している場合を区別できるよう配慮している。

質問項目は以下の評価基準に基づいて得点化された：

質問1～4：「はい」と答えた場合は2点、「いいえ」と答えた場合は1点。

質問5～7：「3回以上」と答えた場合は2点、それ以外の場合は1点。

質問8～12：後ろの2つの選択肢を選んだ場合は2点、前の2つの選択肢を選んだ場合は1点。

これらの質問の得点を合計し、「社会資本得点」として評価した。その得点範囲は12点から24点であり、得点が高いほど社会資本の強度が高いことを示す。

3-1-3 分析方法

本研究では、調査対象者の個人属性、異文化適応の二側面（心理的適応・社会文化的適応）、および社会資本強度に関するデータを収集・整理した。個人属性には性別、年齢、日本語能力、留学形態などが含まれ、異文化適応については心理的適応および社会文化的適応の評価結果を使用した。社会資本強度は、中国人および日本人との友人関係に基づき、一定の計算ルールに従って算出した。

データ分析にはSPSS（Statistical Product and Service Solutions）を用い、社会資本強度に影響を与える要因を多角的に検討した。具体的には、個人属性、心理的適応、社

会文化的適応の三要素が社会資本強度に与える影響を分析し、それぞれの寄与度を評価した。

本研究では、以下の二つの統計分析を組み合わせた：

分散分析（ANOVA）

性別や一人っ子かどうかなどの二値（カテゴリー）変数と社会資本強度との有意差を検定するために用いた。これにより、各群間で社会資本強度に統計的に有意な差があるかを検討した。

多重回帰分析（Multiple Regression Analysis）

連続変数（日本語能力、異文化適応程度など）と社会資本強度の関係を分析するために使用し、回帰係数（ β ）を算出した。

しかし、多重回帰分析のみでは、変数間の共線性（multicollinearity）の影響を排除しきれない可能性があるため、補助的に Spearman の順位相関分析を実施した。統計的に有意な関係が見られた変数について、より適切な分析手法である相関分析を用いて検証を行った。その結果、回帰分析の傾向と一致する相関関係が確認され、本研究の分析結果の妥当性が補強された。

本研究を通じて、個人属性と異文化適応の二要素が留学生の社会資本強度にどのような影響を及ぼすかを解明し、異なる群の特徴を明らかにすることを目的とする。また、多重回帰分析だけでなく相関分析を併用することで、単一の要因ではなく、複数の要因が相互作用しながら社会資本強度を形成するプロセスを明確にすることを目指した。

3-2 半構造インタビュー

3-2-1 調査対象

本研究では、日本の北陸地域に所在する大学に在学している中国人留学生を対象に、半構造化インタビューを実施した。調査対象者は、日本の北陸地域で学業や生活を送る 30 名の中国人留学生である。これらの対象者は、異文化適応および社会資本に関する多様な背景や経験を有することが期待されるため、調査の実施に適していると判断した。また、性別や年齢、専攻、留学形態（私費留学生、公費留学生）、滞在期間といった属性を考慮して、できるだけ多様性を確保するよう配慮した。

3-2-2 調査内容

本調査では、計 14 問の質問を設け、以下の 4 つのカテゴリに分類してインタビューを実施した。具体的には、①個人の社会資本構築に関する質問 6 問、②社会団体の社会資本構築に関する質問 4 問、③異文化コミュニケーションにおける具体的な困難とその対処法に関する質問 2 問、④将来の留学生へのアドバイスと適応措置に関する質問 2 問で構成されている。これらの質問を通じて、留学生が異文化環境においてどのように社会資本を形成し、適応しているかを明らかにすることを目的としている。

調査内容の設計にあたっては、ハオ（2013）の研究を参考に、社会資本が二つの主要な方法で獲得されるという理論に基づいている。一つは、何らかの社会団体に所属し、そのメンバー資格を得ること、もう一つは、人と人との間で交流や交際、さらには資源の交換を通じて社会的な人間関係を構築する方法である。この理論を踏まえ、留学生の社会資本形成を探る際には、個人レベルと組織レベルの両側面に注目する必要があると考えた。

これにより、本調査では、個人的な社会資本（例：友人関係、個人的なネットワーク）と、社会団体を通じて構築される組織的な社会資本（例：学術団体、留学生コミュニティ）を包括的に把握することを目指している。また、異文化適応の際に直面する課題とその解決策、さらには後輩留学生に向けた具体的なアドバイスを含めることで、より実践的な示唆を得ることも意図している。

3-2-3 分析方法

インタビューの結果は、テーマ分析法（thematic analysis）を用いて分析・整理した。テーマ分析法とは、定性データに潜むパターンやテーマを抽出し、それを整理・解釈する手法である。具体的には、まずインタビューで得られた回答を逐語録にまとめ、その内容を精読することで初期のコード（coding）を作成した。次に、これらのコードを類似性や関連性に基づいてグループ化し、主要なテーマを明確化した。最後に、テーマごとにデータを整理し、個人レベルと組織レベルに分類して解釈を行った。

本研究の目的は、留学生が社会資本を構築する過程において、個人と組織の両側面で直面する具体的な困難を分析し、それを統計的に整理することである。テーマ分析法を用いることで、個々の留学生が抱える課題や経験を定性的に把握し、それらが社会資本形成のどの部分で影響を及ぼしているのかを明らかにすることを目指している。例えば、個人的

なネットワークの構築における言語的・文化的障壁や、組織的な社会資本を構築する際の所属団体での役割や人間関係の困難など、具体的なテーマを抽出することにより、社会資本形成のプロセスにおける問題点を可視化する。

第4章 研究結果

4-1 アンケート調査の結果

分析結果一覧表

分析項目	変数	中国人社会資本 との関係	p 値(中国人)	日本人社会資本 との関係	p 値(日本人)
個人属性	好きな芸能人有無	有意	P=0.001	無関係	P=0.469
	性格	有意な正相関	P=0.00045	有意な正相関	P=0.00388
	在日年数	有意な相関なし	P=0.254	有意水準に近い	P=0.060
	固定交際の日本人	有意な相関なし	P=0.057	有意な正相関	P=0.036
	性別	無関係	P=0.217	無関係	P=0.456
	年齢	無関係	P=0.428	無関係	P=0.178
	仕事経験の有無	無関係	P=0.825	無関係	P=0.548
	日本人恋人の有無	無関係	P=0.848	無関係	P=0.604
	一人っ子か	無関係	P=0.106	無関係	P=0.587
	日本以外の留学経験	無関係	P=0.490	無関係	P=0.393
	出身地	無関係	/	無関係	/

	学歴	無関係	/	無関係	/
	専門	無関係	/	無関係	/
	日本について の事前熟知度	無関係	/	無関係	/
	大学について の事前熟知度	無関係	/	無関係	/
	来日前の 日本語能力	無関係	/	無関係	/
	現在の日 本語能力	無関係	/	無関係	/
	留学形態	無関係	/	無関係	/
	バイト時 間数	無関係	/	無関係	/
	社交アプリ 使用頻度	無関係	/	無関係	/
異文化適 応状態	抑うつ状 態	有意な負の相関	P=0. 00056	有意な負の相関	P=0. 0055
	社会文化 適応状態	有意な負の相関	P=0. 0119	有意な負の相関	P=0. 0393

4-1-1 対象者の個人属性

本研究では、第3章で述べたアンケート調査のように、以下の21項目にわたる個人属性について調査を行った：「性別」「年齢」「在学中の大学」「出身地（省単位）」「性格」「日本滞在期間」「現在の身分（学部生、別科生、修士課程生など）」「来日前の職業経験」「専攻」「来日前の日本に関する知識」「来日前の在学予定大学に関する知識」「来日前の日本語能力」「現在の日本語能力」「留学形態（私費留学生、公費留学生）」「日本人の恋人の有無」「アルバイトの平均週勤務時間」「日本での固定的な交際関係にある日本人の友人の人数」「兄弟姉妹の有無」「日本のソーシャルメディア（LINE、Instagramなど）の利用頻度」。なお、「在学中の大学」は、回答者が北陸地域の中国人留学生であることを確認するために設定されたものであり、統計結果には含めず、残りの20項目を個人属性として分析した。これらの項目は、留学生の背景や適応状況を把握するために設定されたものである。以下に、統計結果の一覧表を示す。

(1) 性別

性別に関しては、男性の割合が女性よりも多い結果となった。調査対象者104人のうち、59人が男性であり、全体の56.73%を占めている。一方、女性は45人であり、全体の43.27%を占めている。この結果を図4-1に示す。

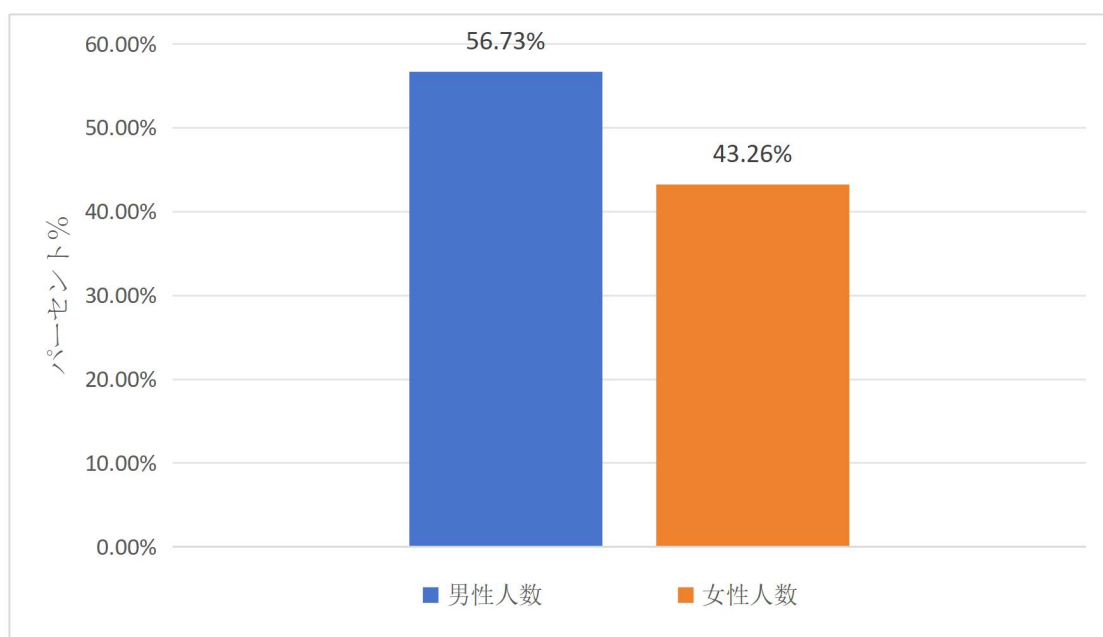


図 4-1 統計内容-性別統計

(2) 年齢

年齢についての調査では、対象者は大学在学学生を主とした 104 人であり、その年齢分布には以下の特徴が見られる。調査結果によれば、「21 歳」と回答した人が最も多く、20 人で全体の 19.23%を占めている。次いで、「22 歳」と「23 歳」の回答者がそれぞれ 17 人（16.35%）であり、これらの年齢層が調査対象者の中心をなしていることが分かる。

さらに、「20 歳」と回答した人は 11 人（10.58%）、「24 歳」と回答した人は 10 人（9.62%）であった。「28 歳」と回答した人は 6 人（5.77%）、「29 歳」と「30 歳」と回答した人はそれぞれ 4 人（3.85%）、「27 歳」と「31 歳」と回答した人はそれぞれ 3 人（2.88%）であった。

一方で、少数派として、「19 歳」「32 歳」「33 歳」と回答した人はそれぞれ 2 人（1.92%）、「17 歳」「26 歳」「55 歳」と回答した人はそれぞれ 1 人（0.96%）と確認された。

このように、調査対象者の年齢分布は 20 代前半に集中しており、特に「21 歳」から「23 歳」が大半を占める一方で、30 代や 50 代の回答者も含まれており、調査対象の多様性が確認される。調査対象者の年齢分布の詳細を図 4-2 に示す。

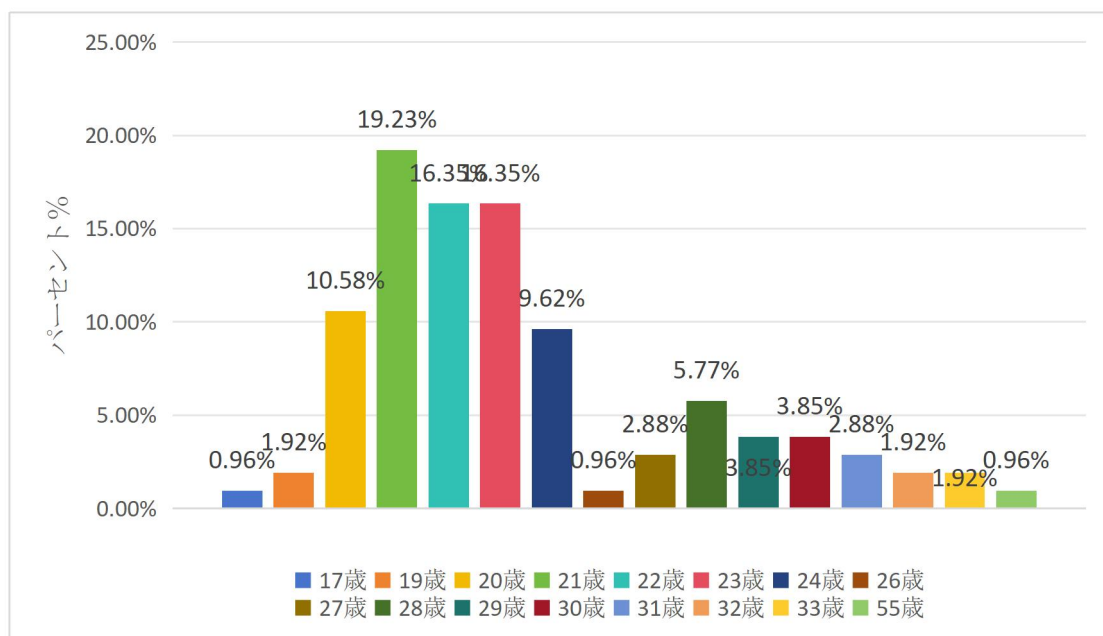


図 4-2 統計内容-年齢統計

(3) 出身地

出身地についての調査では、「遼寧」と回答した人が最も多く、24人で全体の23.08%を占めている。次に多かったのは「浙江」で9人(8.65%)、「北京」で7人(6.73%)であった。「陝西」は6人で(5.77%)、「江蘇」「四川」「山東」はそれぞれ5人(4.81%)、「雲南」「広東」「安徽」「黒竜江」はそれぞれ4人(3.85%)であった。さらに、「新疆」「河北」「河南」はそれぞれ3人(2.88%)、「吉林」「内蒙古」「山西」「広西」「湖南」「甘肅」はそれぞれ2人(1.92%)であった。その他、「貴州」「上海」「湖北」「福建」「江西」「天津」はそれぞれ1人(0.96%)であった。

この結果から、調査対象者の出身地は「遼寧」に集中している一方で、全国各地に多様に分布していることが分かる。これらの結果を基に、調査対象者の地理的な分布の特徴を図4-3に示す。

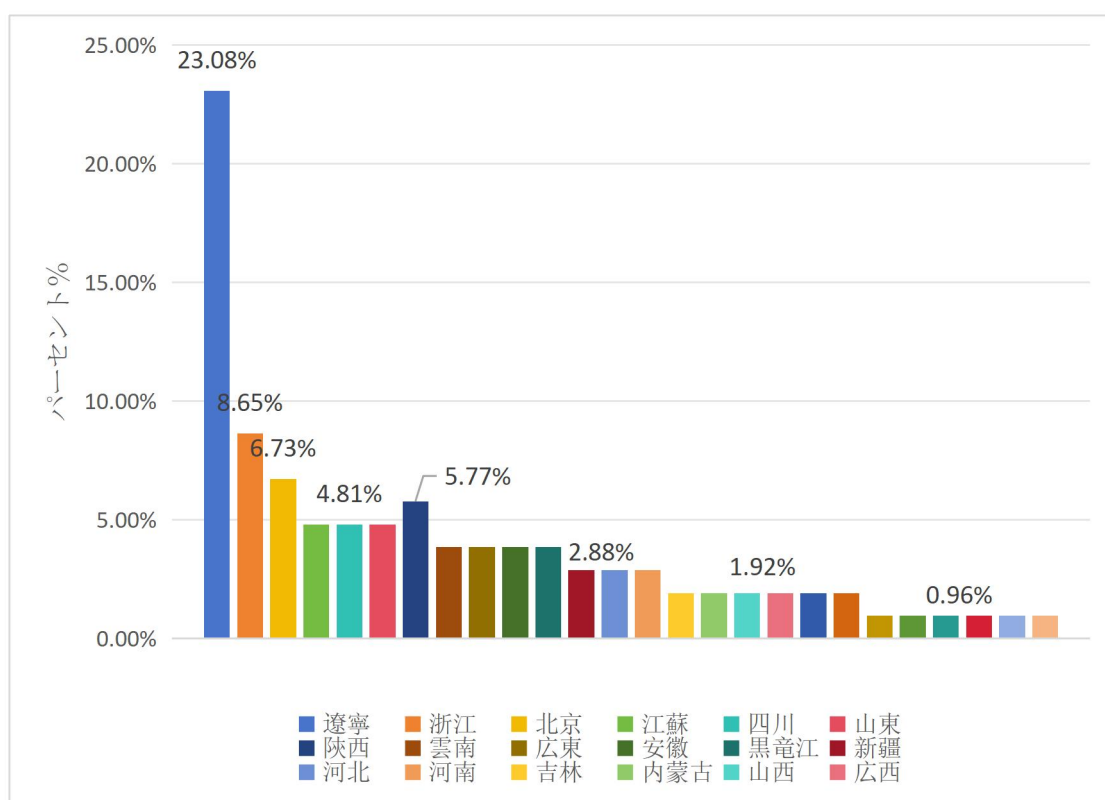


図 4-3 統計内容-出身地統計

(4) 性格

性格についての調査では、「比較的外向的」と回答した人が最も多く、40人で全体の38.46%を占めている。次に多かったのは「どちらとも言えない」で26人（25.00%）、続いて「比較的内向的」と回答した人が22人（21.15%）であった。「非常に内向的」と回答した人は10人（9.62%）、「非常に外向的」と回答した人は6人（5.77%）であった。この結果から、多くの調査対象者が比較的外向的な性格を持つ傾向が見られるが、「どちらとも言えない」と回答した人も多いことが特徴的である。この結果を基に、性格分布の特徴を図4-4に示す。

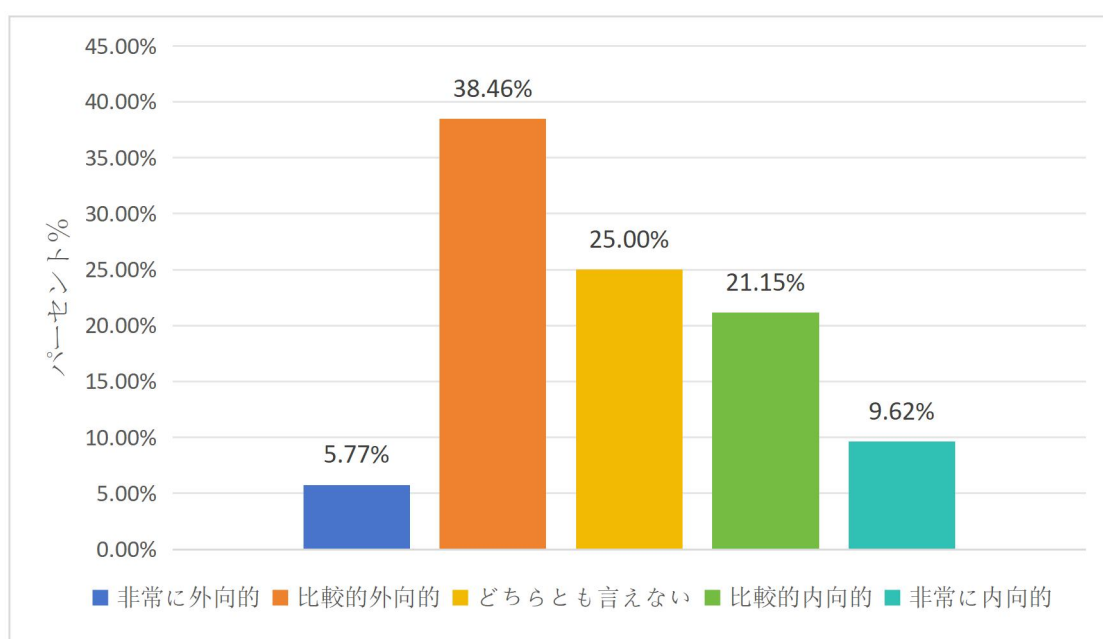


図 4-4 統計内容-性格統計

(5) 在日年数

在日年数についての調査では、「1～2年」と回答した人が最も多く、44人で全体の42.31%を占めている。次に多かったのは「1年以下」で37人（35.58%）、続いて「2～3年」と回答した人が16人（15.38%）であった。「3年以上」と回答した人は7人（6.73%）であった。この結果から、調査対象者の多くが比較的短い期間（1～2年）日本に滞在していることが分かる。この結果を基に、在日年数の分布を図4-5に示す。

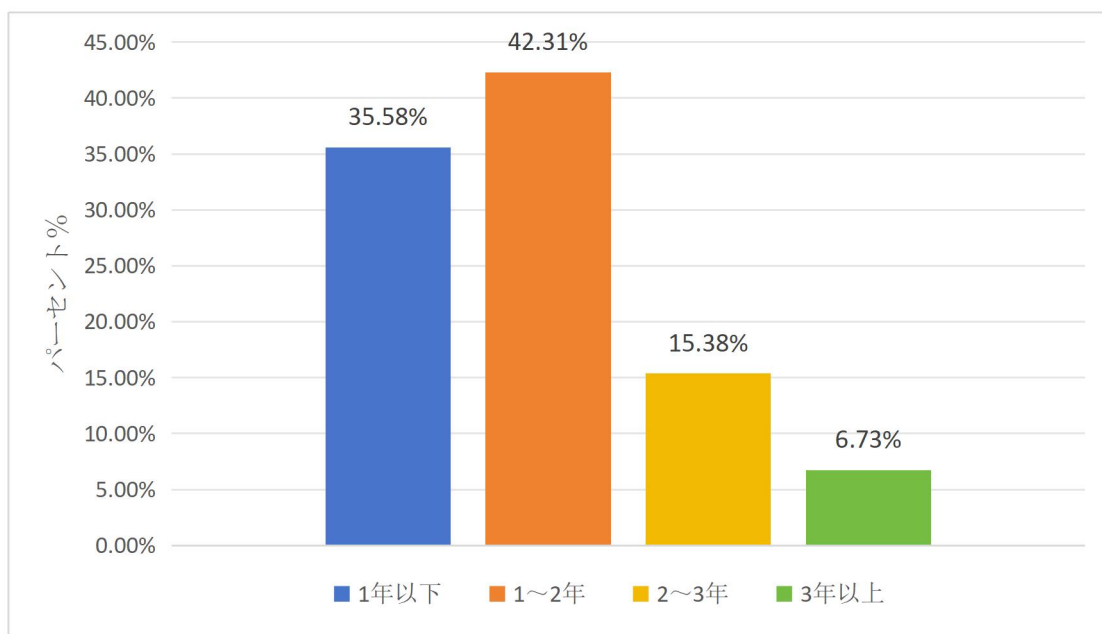


図 4-5 統計内容-在日年数統計

(6) 身分

身分に関しては、調査対象者の中で学部生と回答した人が最も多く、68人で全体の65.38%を占めている。次に多かったのは博士前期で23人(22.11%)となり、大学院生の割合も一定数確認できた。別科生と回答した人は7人(6.73%)、博士后期と回答した人は6人(5.77%)であり、進学目的で日本に留学している人が全体の約四分の一を占めている。この結果を基に、調査対象者の学業上の身分分布を図4-6に示す。

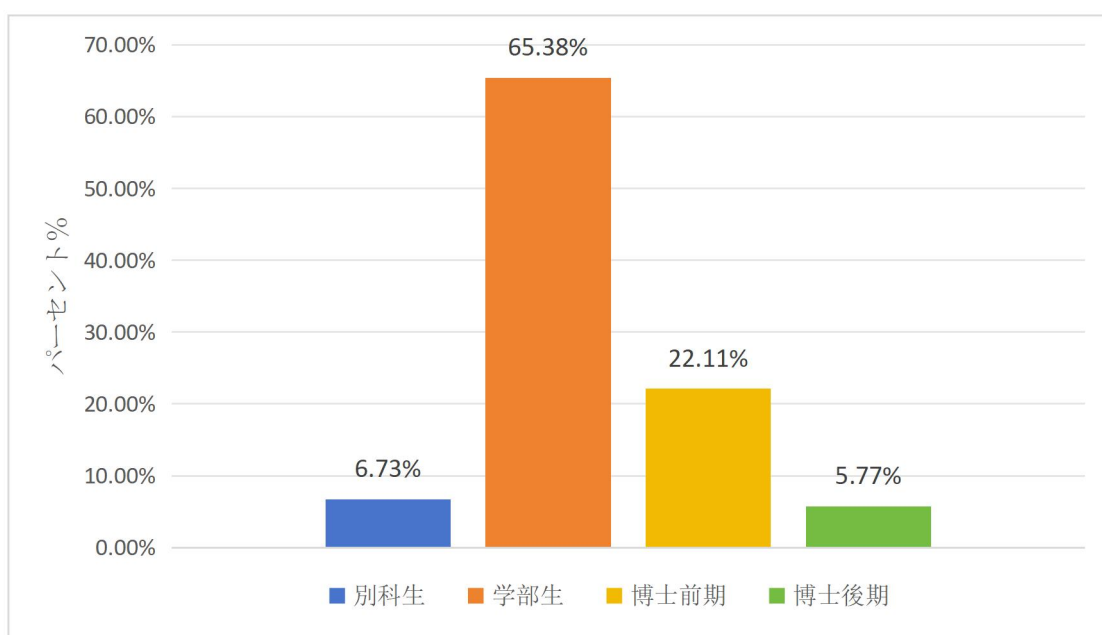


図 4-6 統計内容-身分統計

(7) 来日前仕事経験

来日前的工作经验に関しては、調査対象者の中で仕事経験なしと回答した人が最も多く、78人で全体の75%を占めている。一方、仕事経験ありと回答した人は26人で全体の25%となっている。この結果は、調査対象者の大多数が学生としての身分で留学を選択していることを反映していると言える。この結果を基に、来日前的仕事経験の分布を図4-7に示す。

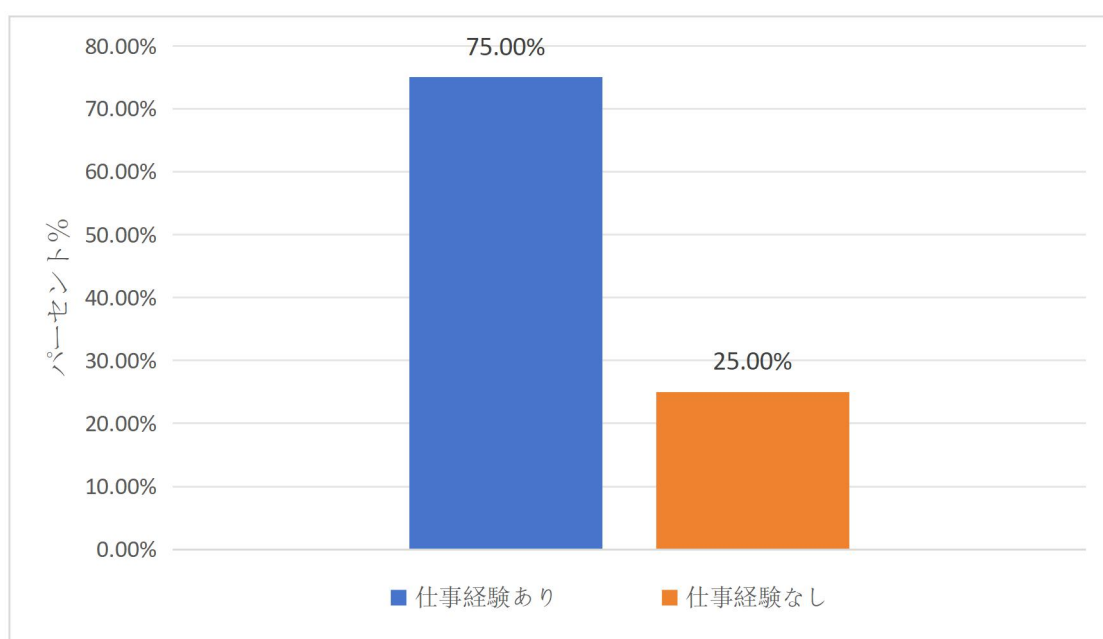


図 4-7 統計内容-来日前仕事経験統計

(8) 専門

専門に関しては、調査対象者の中で文系と回答した人が最も多く、74人で全体の71.15%を占めている。理系で15人(14.42%)と同じく、ITと回答した人も15人(14.42%)となっている。この結果から、文科系の専攻が調査対象者の大部分を占めていることが分かる。この結果を基に、調査対象者の専攻分布の特徴を図4-8に示す。

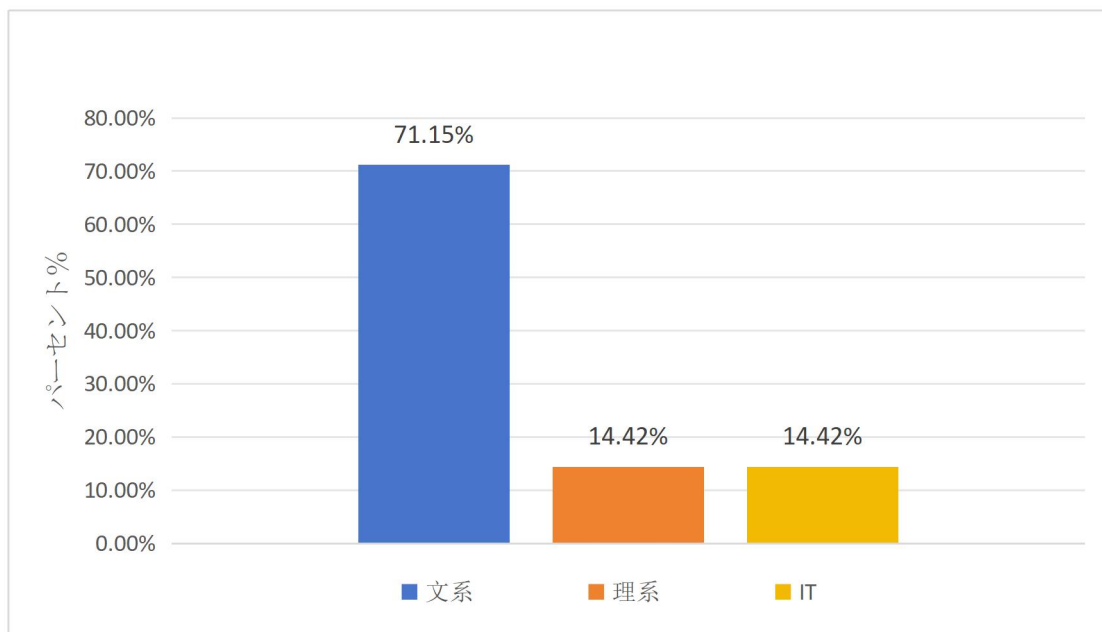


図 4-8 統計内容-専門統計

(9) 日本についての事前熟知度

来日前の日本に対する熟知度についての調査では、「一般的に知っている」と回答した人が最も多く、52人で全体の50.00%を占めている。次に多かったのは「比較的良好に知っている」で38人(36.54%)、続いて「とてもよく知っている」と「あまり知らない」がそれぞれ7人(6.73%)であった。この結果から、調査対象者の多くは日本に対してある程度の知識を持っているが、少数の人々は非常に詳しいか、あまり詳しくない傾向も見られる。

この結果を基に、日本についての事前熟知度の分布を図 4-9 に示す。

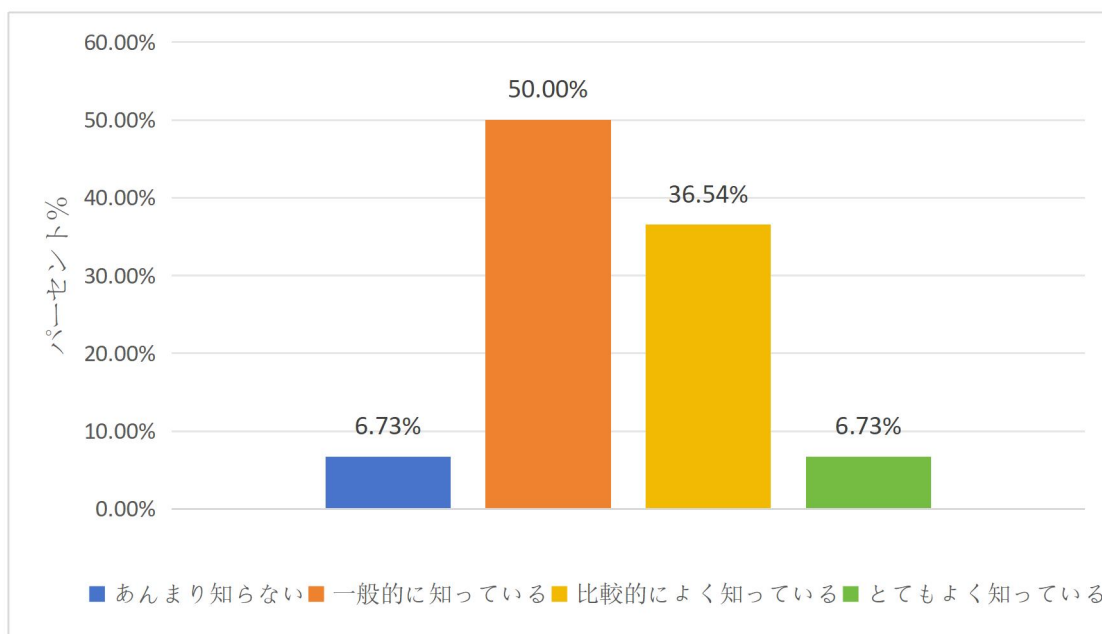


図 4-9 統計内容-日本についての事前熟知度統計

(10) 大学についての事前熟知度

入学前に、大学に対する熟知度に関して、調査対象者の中で「一般的に知っている」と回答した人が最も多く、51人で全体の49.04%を占めている。次に多かったのは「あんまり知らない」で26人(25%)となっている。「比較的によく知っている」と回答した人は24人(23.08%)、非常に熟知していると回答した人は3人(2.88%)であった。この結果を基に、調査対象者の大学に対する事前熟知度の分布を図4-10に示す。

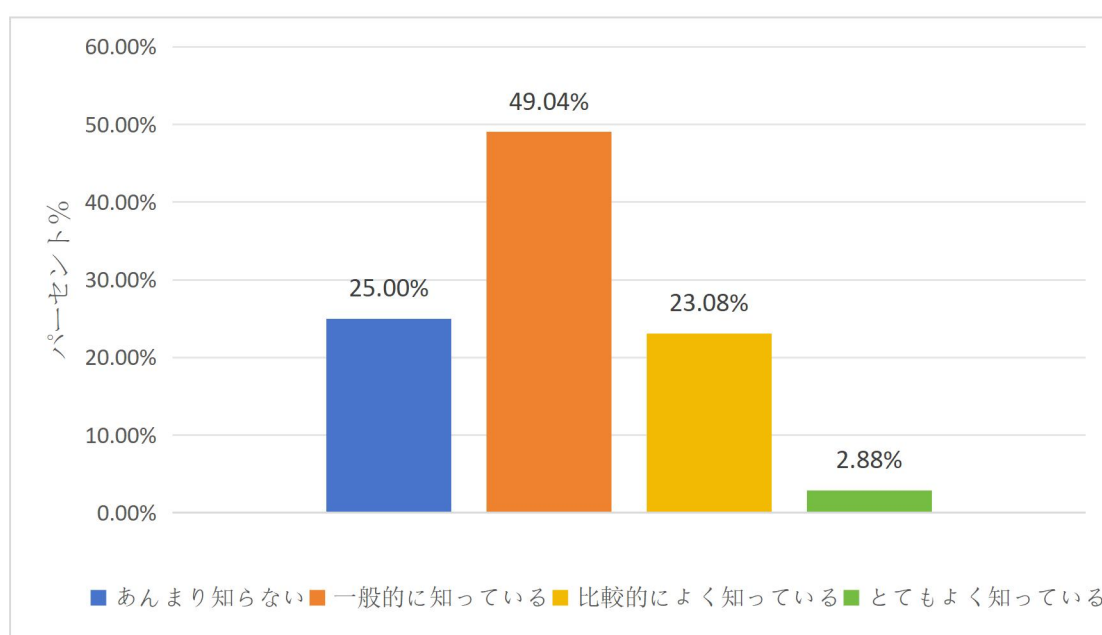


図 4-10 統計内容-大学についての事前熟知度統計

(11) 来日前の日本語能力

来日前の日本語能力についての調査では、「JLPT2 級」と回答した人が最も多く、43 人で全体の 41.35%を占めている。次に多かったのは「JLPT1 級」で 19 人（18.27%）、続いて「零基础（全く知らない）」が 16 人（15.38%）、「JLPT3 級」が 15 人（14.42%）であった。「JLPT4 級」と回答した人は 7 人（6.73%）、「JLPT5 級」と回答した人は 4 人（3.85%）であった。この結果から、調査対象者の多くが中級以上の日本語能力を有している一方で、全く知識のない人も一定数いることが分かる。この結果を基に、調査対象者の日本語能力分布を図 4-11 に示す。

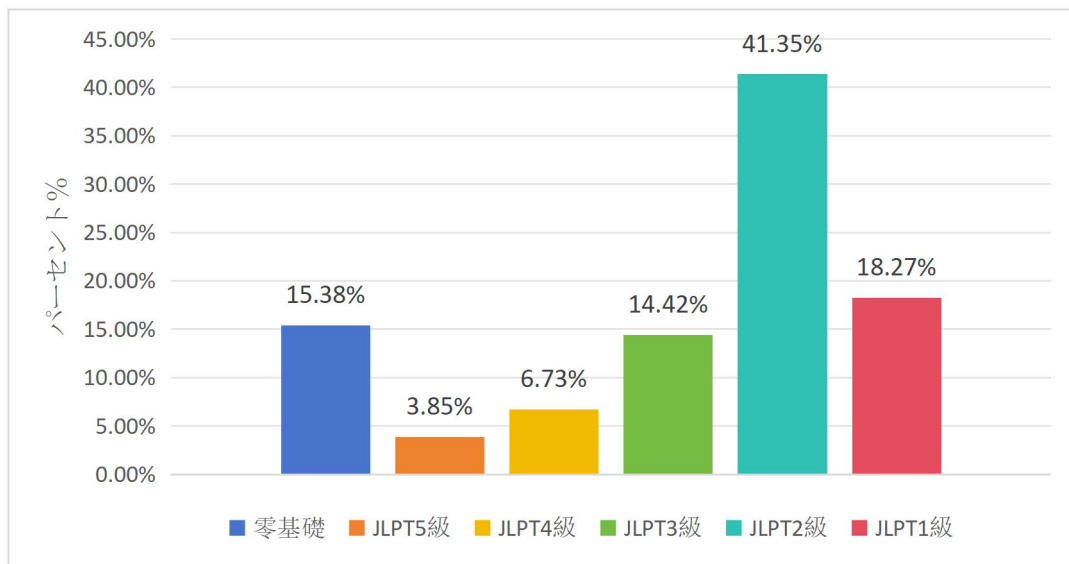


図 4-11 統計内容-来日前の日本語能力統計

(12) 現在の日本語能力

現在の日本語能力についての調査では、「JLPT1 級」と回答した人が最も多く、48 人で全体の 46.15%を占めている。次に多かったのは「JLPT2 級」で 39 人（37.50%）、続いて「JLPT3 級」が 13 人（12.50%）であった。「零基础（全く知らない）」と「JLPT4 級」と回答した人はそれぞれ 2 人（1.92%）であった。この結果から、調査対象者の多くが上級以上の日本語能力を持っていることと来日後全体的に留学生の日本語能力の向上が見える。この結果を基に、調査対象者の現在の日本語能力分布を図 4-12 に示す。

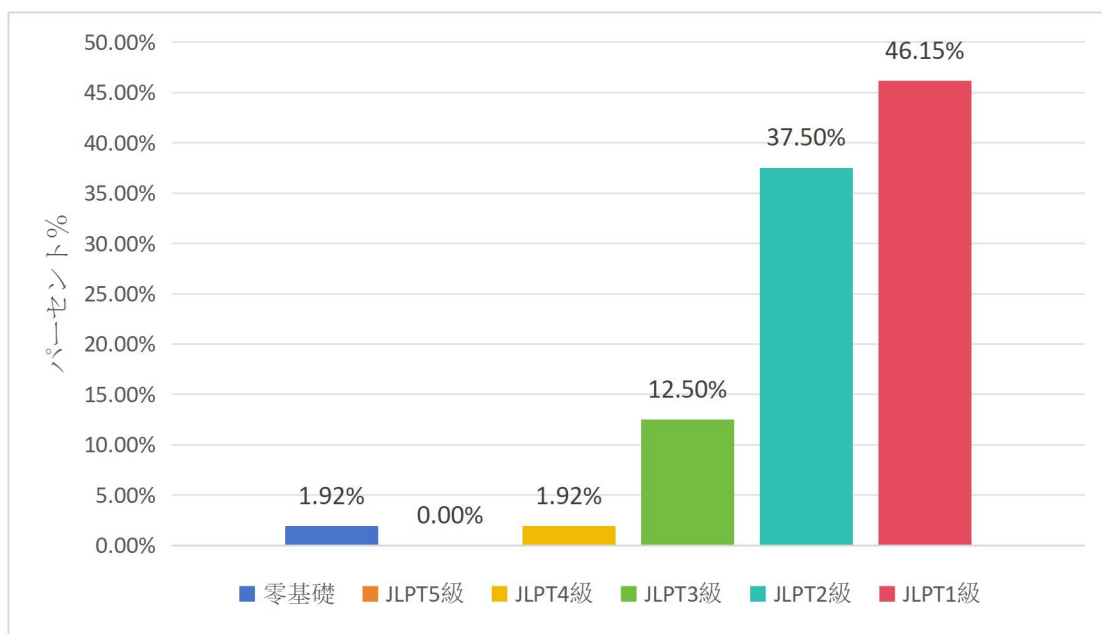


図 4-12 統計内容-今の日本語能力統計

(13) 留学形態

留学形態についての調査では、「私費留学生（奨学金なし）」と回答した人が最も多く、68人で全体の65.38%を占めている。次に多かったのは「私費留学生（奨学金あり）」で30人（28.85%）、続いて「公費留学生」と回答した人は6人（5.77%）であった。この結果から、多くの調査対象者が私費留学生であり、その中でも奨学金を受け取っていない人が大半を占めていることが分かる。この結果を基に、調査対象者の留学身份の分布を図 4-13 に示す。

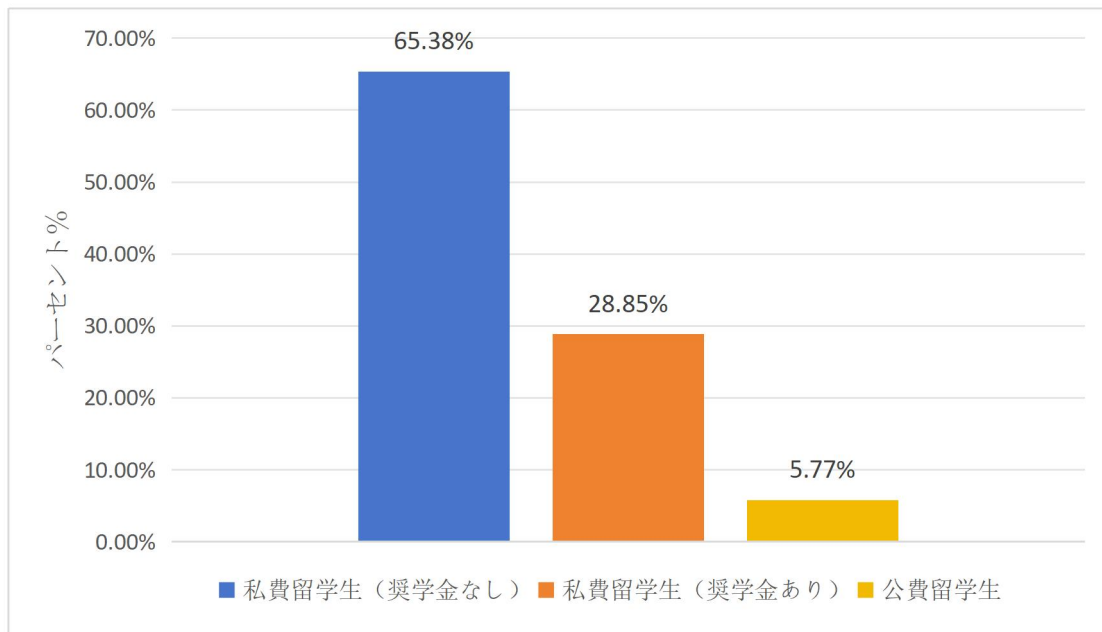


図 4-13 統計内容-留学形態統計

(14) 日本人の恋人

日本人の恋人の有無に関して、「いない」と回答した人が最も多く、99人で全体の95.19%を占めている。「いる」と回答した人は5人で、全体の4.81%を占めている。この結果から、大多数の中国人留学生在日本での生活において日本人との恋愛関係を持っていないことが分かる。しかしながら、一部の留学生においては、日本人と恋愛関係を築いているケースも確認されており、異文化交流の一つの形態として注目できる。この結果を図 4-14 に示す。

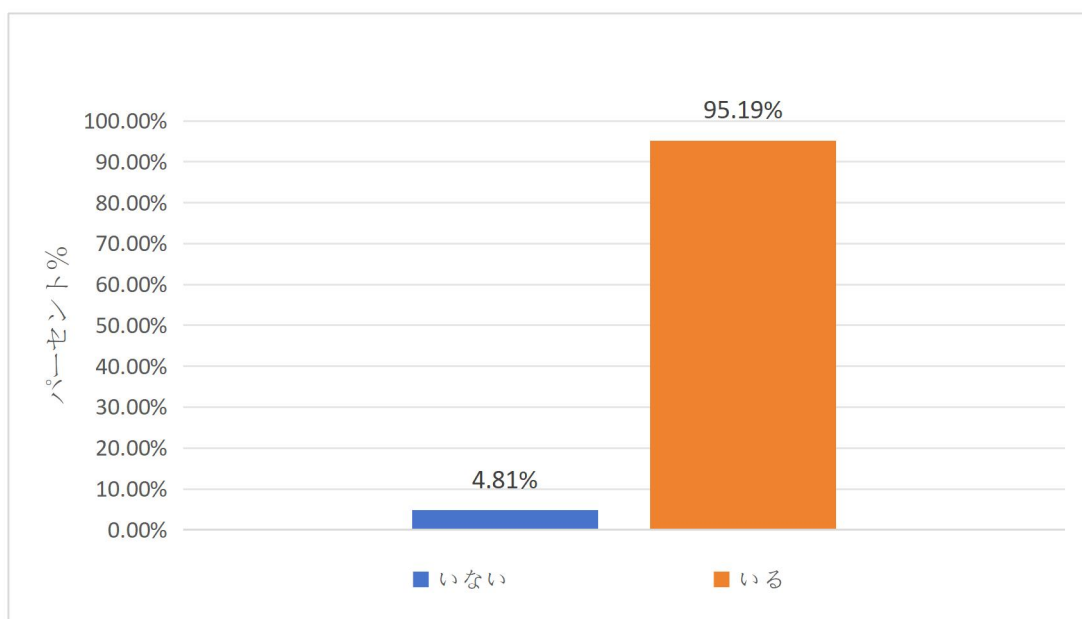


図 4-14 統計内容-日本人恋人統計

(15) 一週間バイト時間数

日本での一週間のアルバイト時間についての調査では、「0 時間」と回答した人が最も多く、60 人で全体の 57.69%を占めている。次に多かったのは「6～12 時間」で 18 人(17.31%)、続いて「12～18 時間」が 12 人(11.54%)であった。また、「0～6 時間」と回答した人は 8 人(7.69%)、「18 時間以上」と回答した人は 6 人(5.77%)であった。この結果から、多くの中国人留学生がアルバイトに費やす時間が比較的少ない傾向が見られる。この結果を図 4-15 に示す。

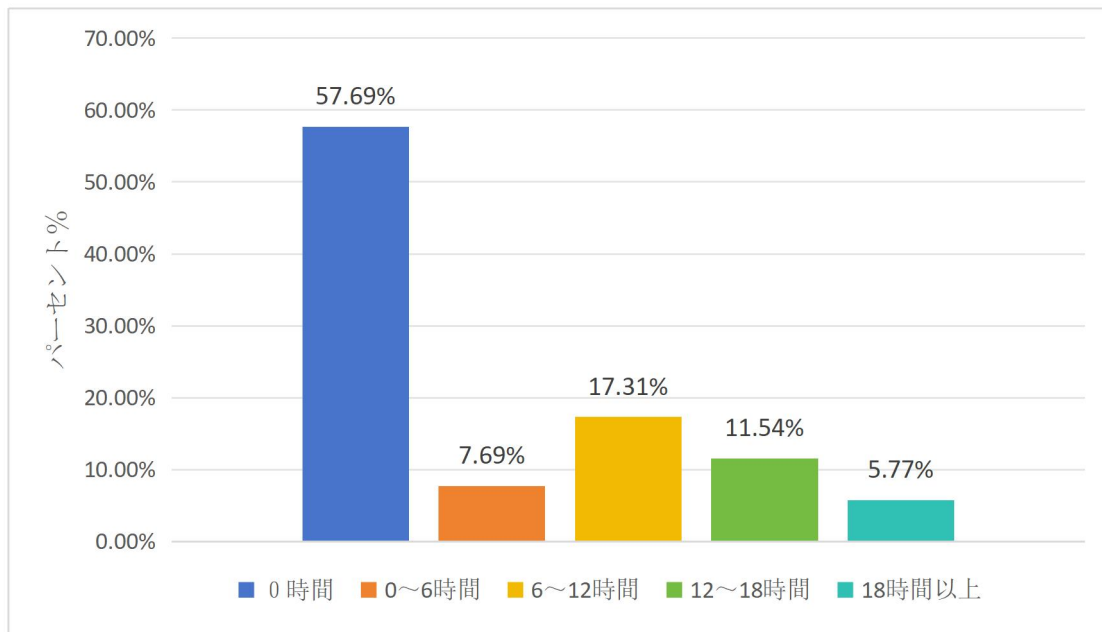


図 4-15 統計内容-バイト時間数統計

(16) 固定交際の日本人

日本で固定的に交際している日本人の友人の数に関して、調査対象者の中で「いない」と回答した人が最も多く、65人で全体の62.50%を占めている。次に多かったのは「1人」で17人(16.35%)、続いて「2人」と回答した人が12人(11.54%)であった。また、「3人以上」と回答した人は7人(6.73%)、「3人」と回答した人は3人(2.88%)であった。この結果から、多くの調査対象者が日本人との固定的な交際関係において少人数または交際の無い傾向が見られる。この結果を図 4-16 に示す。

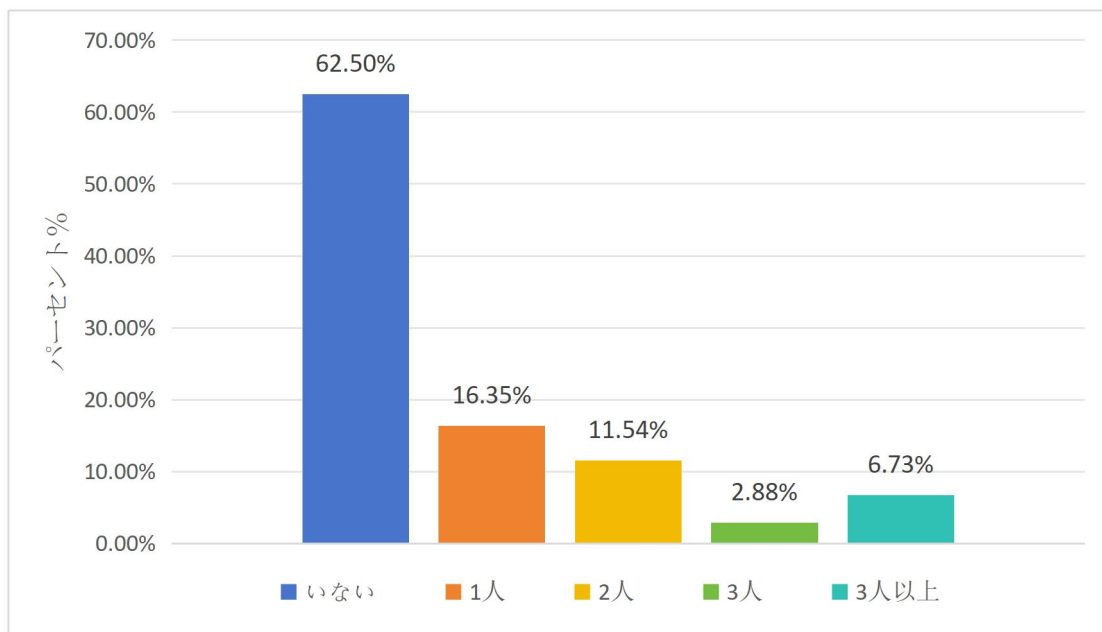


図 4-16 統計内容-固定交際の日本人統計

(17) 一人っ子

一人っ子かに関して、調査対象者の中ではいと回答した人が最も多く、71人で全体の68.27%を占めている。一方、いいえと回答した人は33人であり、全体の31.73%を占めている。この結果から、多くの中国人留学生は一人っ子が、兄弟姉妹を持つ留学生も一定数存在することが確認された。この結果を図 4-17 に示す。

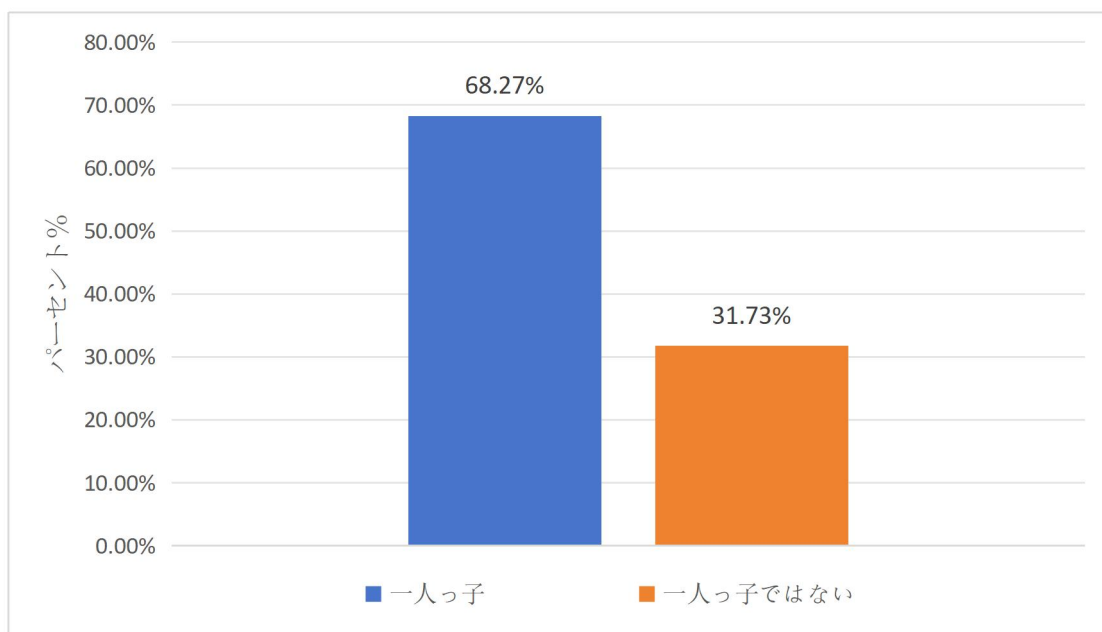


図 4-17 統計内容-一人っ子統計

(18) 日本以外の留学経験

日本以外での留学経験についての調査において、「ない」と回答した人が最も多く、97人で全体の93.27%を占めている。「はい」と回答した人は7人で、全体の6.73%を占めている。この結果から、調査対象者の大半が日本以外での留学経験を持っていないことが明らかとなった。この結果を図 4-18 に示す。

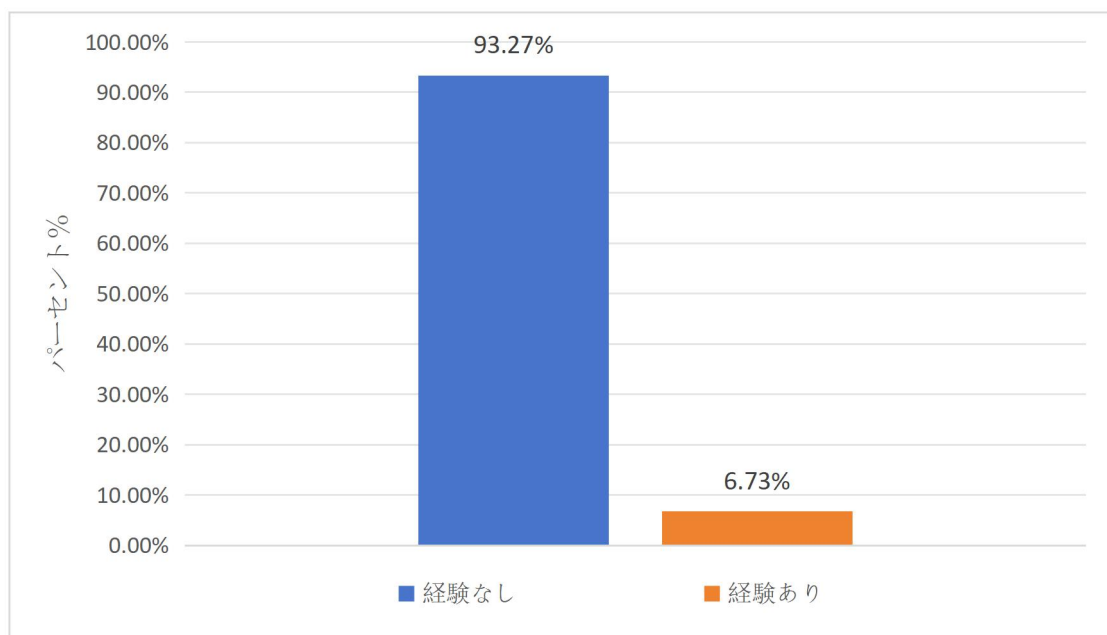


図 4-18 統計内容-日本以外の留学経験統計

(19) 好きな日本芸能人

好きな日本の芸能人がいるかどうかについての調査では、「いない」と回答した人が最も多く、60人で全体の57.69%を占めている。「是」と回答した人は44人で、全体の42.31%を占めている。この結果から、調査対象者の中では、日本の芸能人に興味を持っていない人が過半数を占めていることが分かる。この結果を図 4-19 に示す。

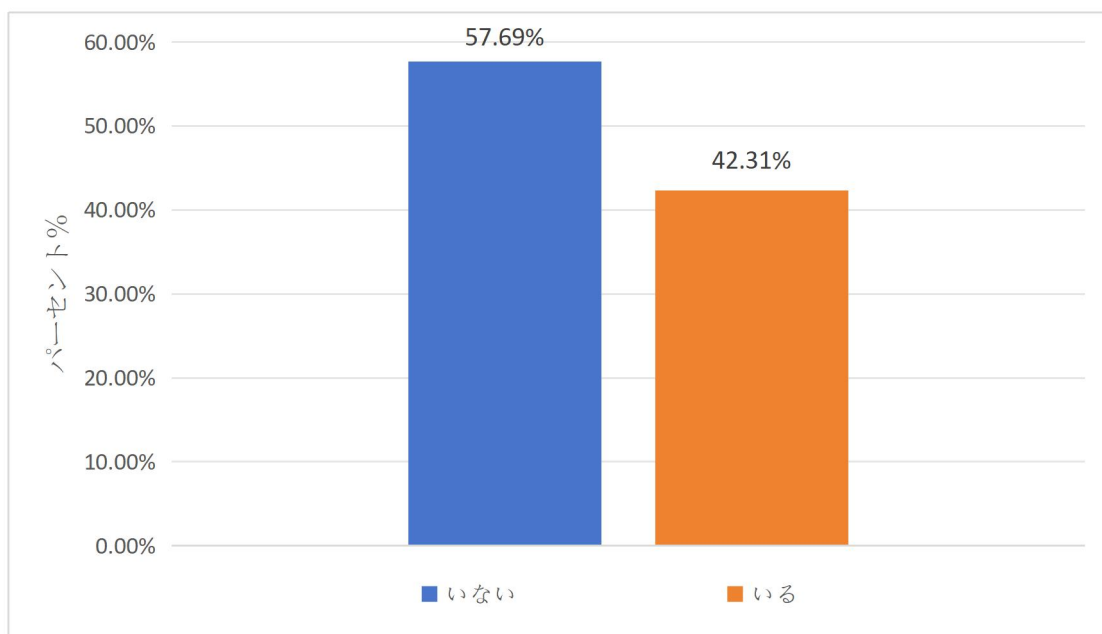


図 4-19 統計内容-好きな日本芸能人統計

(20) 日本の社交アプリ使用頻度

日本のソーシャルメディア（LINE、Instagram など）の使用頻度についての調査では、「週 1～3 回」と回答した人が最も多く、54 人で全体の 51.92%を占めている。次に多かったのは「完全に使用しない」で 21 人（20.19%）、続いて「頻繁に使用する」と回答した人が 17 人（16.35%）であった。「一周 6～12 回」と「一周 3～6 回」と回答した人はそれぞれ 6 人（5.77%）であった。この結果から、多くの調査対象者が比較的少ない頻度で日本のソーシャルメディアを使用していることが分かる。この結果を図 4-20 に示す。

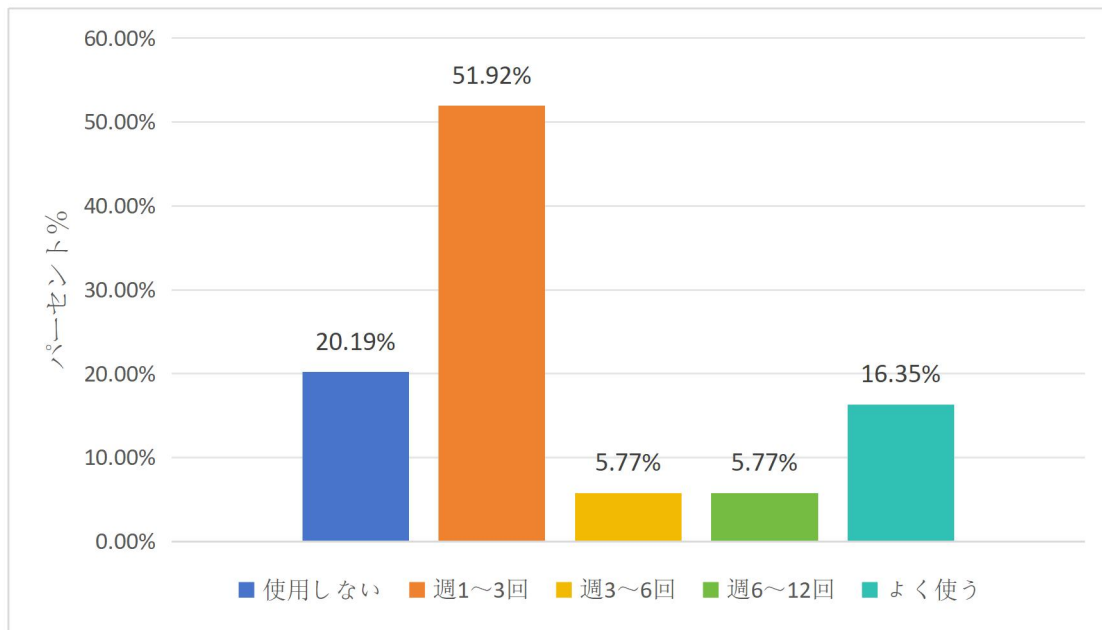


図 4-20 統計内容-社会アプリの使用頻度統計

4-1-2 個人属性と社会資本の関係

本研究では、社会資本強度に影響を与える要因を明らかにすることを目的とし、北陸地域に留学している中国人留学生を対象に 個人属性と社会資本強度の関係を検討する。具体的には、第3章で述べたように、対象者の性別、年齢など20項目の個人属性を用いて、統計ソフト SPSS を活用し、分散分析 (ANOVA) および多重回帰分析 (MRA) を実施する。

本研究では、社会資本強度を「中国人の友人を意識したもの」と「日本人の友人を意識したもの」の2種類に分類し、それぞれ個別に分析を行う。まず、分散分析 (ANOVA) を用いて、性別や留学形式などの二値変数が社会資本強度に与える影響の有無を検討する。その後、多重回帰分析 (MRA) を用いて、年齢、日本語能力、異文化適応スコアなどの連続変数が社会資本強度に与える影響の程度を評価する。

本分析を通じて、個人属性が社会資本強度に及ぼす影響の有無やその影響の大きさを明らかにし、留学生の社会関係の特徴を解明することを目指す。

分散分析による考察

(1) 性別

中国人との社会資本強度得点

Q1 性別	平均値	度数	標準偏差
男性	18.254	59	2.604
女性	18.844	45	2.335
合計	18.51	104	2.497

表 4-1 性別報告書 1

Q1 性別	平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
グループ間 (結合)	8.893	1	8.893	1.433	0.217
グループ内	633.098	102	6.207		
合計	641.99	103			

表 4-2 性別分散分析表 1

表 4-1 によると、北陸地域で在学中の中国人留学生における、男性と女性の中国人との社会資本強度の平均値はそれぞれ 18.254 と 18.844 であり、標準偏差はそれぞれ 2.604 と 2.335 である。これらの結果から、男性と女性の中国人との社会資本強度得点の平均値はほぼ同じであることが示唆される。

また、表 4-2 に示されるように、性別による社会資本強度の有意確率は $P=0.234$ であり、この値は統計学的有意水準である 0.05 を上回る。したがって、性別が中国人留学生の中国人との社会資本強度に与える影響は統計的に有意ではないと結論付けられる。

日本人との社会資本強度得点

Q1 性別	平均値	度数	標準偏差
男性	17.661	59	3.166
女性	18.156	45	3.097

合計	17.875	104	3.13
----	--------	-----	------

表 4-3 性別報告書 2

Q1 性別	平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
グループ間 (結合)	6.244	1	6.244	0.635	0.456
グループ内	1003.131	102	9.835		
合計	1009.375	103			

表 4-4 性別分散分析表 2

表 4-3 によると、北陸地域で在学中の中国人留学生における、男性と女性の日本人との社会資本強度の平均値はそれぞれ 17.661 と 18.156 であり、標準偏差はそれぞれ 3.166 と 3.097 である。これらの結果から、男性と女性の日本人との社会資本強度得点の平均値にはわずかな違いが見られるものの、大きな差はないと考えられる。

また、表 4-4 に示されるように、性別による社会資本強度の有意確率は $P=0.427$ であり、この値は統計学的有意水準である 0.05 を上回る。したがって、性別が中国人留学生の日本人との社会資本強度に与える影響は統計的に有意ではないと結論付けられる。

(2) 年齢

中国人との社会資本強度得点

Q2 年齢	平均値	度数	標準偏差
23 歳及び以下	18.368	68	2.539
23 歳以上	18.778	36	2.427
合計	18.51	104	2.497

表 4-5 年齢報告書 1

Q2 年齢	平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
グループ間	3.959	1	3.959	0.633	0.428

(結合)					
グループ内	638.031	102	6.255		
合計	641.99	103			

表 4-6 年齢分散分析表 1

本研究の対象者の年齢は 17 歳から 55 歳までと幅広く、平均年齢は 23.9 歳であった。研究対象が大学に在学中の留学生であり、中国人留学生の交換生が多く含まれる点を考慮し、23 歳以下を大学段階と見なして 23 歳以下と 23 歳以上の 2 つのグループに分類し、有意性を検討した。表 4-5 に示すように、北陸地域で在学中の中国人留学生における 23 歳以下のグループと 23 歳以上のグループの中国人との社会資本強度の平均値は、それぞれ 18.368 と 18.778 であり、標準偏差はそれぞれ 2.539 と 2.427 であった。この結果から、両グループ間で中国人との社会資本強度得点にはわずかな差異が見られるものの、大きな差はないと考えられる。表 4-6 に示されるように、年齢と中国人留学生の中国人との社会資本強度の有意確率は $P=0.428$ であり、この値は統計学的有意水準である 0.05 を上回っていた。したがって、年齢が中国人留学生の中国人との社会資本強度に与える影響は統計的に有意ではないことが示唆された。

日本人との社会資本強度得点

Q2 年齢	平均値	度数	標準偏差
23 歳及び以下	17.574	68	3.097
23 歳以上	18.444	36	3.157
合計	17.875	104	3.13

表 4-7 年齢報告書 2

Q2 年齢	平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
グループ間 (結合)	17.854	1	17.854	1.837	0.178
グループ内	991.521	102	9.721		
合計	1009.375	103			

表 4-8 年齢分散分析表 2

表 4-7 に示すように、北陸地域で在学中の中国人留学生における 23 歳以下のグループと 23 歳以上のグループの日本人との社会資本強度の平均値は、それぞれ 17.574 と 18.444 であり、標準偏差はそれぞれ 3.097 と 3.157 であった。この結果から、両グループ間で日本人との社会資本強度得点にはわずかな差異が見られるものの、大きな差はないと考えられる。表 4-8 に示されるように、年齢と中国人留学生の日本人との社会資本強度の有意確率は $P=0.178$ であり、この値は統計学的有意水準である 0.05 を上回っていた。したがって、年齢が中国人留学生の日本人との社会資本強度に与える影響は統計的に有意ではないことが示唆された。

(3) 仕事経験

中国人との社会資本強度得点

Q8 仕事経験	平均値	度数	標準偏差
あり	18.000	24	3.426
なし	17.838	80	3.058
合計	18.51	104	2.497

表 4-9 仕事経験報告書 1

Q8 仕事経験	平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
グループ間 (結合)	0.499	1	0.499	0.049	0.825
グループ内	1033.929	102	10.137		
合計	1034.428	103			

表 4-10 仕事経験分散分析表 1

表 4-25 の結果から、来日前に仕事経験のあるグループとないグループの間で、中国人との社会資本強度の平均値にほとんど差が見られない。仕事経験の有無にかかわらず、得点はそれぞれ 17.838（無）と 18.000（有）であり、標準偏差も大きく異ならない。表 4-26 では、分散分析の結果として F 値=0.049、有意確率 $P=0.825$ が示されている。この P 値は統計学的有意水準を大きく超えており、仕事経験の有無が中国人との社会資本強度に統計的

に有意な影響を与えるとは言えない。仕事経験が中国人との社会資本強度に影響を与えない理由として、留学生全体が同じような環境で中国人と交流する機会を持つ可能性が考えられる。また、仕事経験がない場合でも、学業を通じて社会資本を構築する場が多く存在することが影響しているかもしれない。

日本人との社会資本強度得点

Q8 仕事経験	平均値	度数	標準偏差
あり	16.375	24	3.801
なし	15.925	80	3.209
合計	17.875	104	3.13

表 4-11 仕事経験報告書 2

Q8 仕事経験	平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
グループ間 (結合)	3.564	1	3.564	0.363	0.548
グループ内	1000.81	102	9.815		
合計	1004.375	103			

表 4-12 仕事経験分散分析表 2

表 4-27 の結果から、日本人との社会資本強度の平均値も仕事経験の有無による差は小さい。仕事経験のないグループは 15.925、有るグループは 16.375 であり、標準偏差も両グループで大きな差はない。表 4-28 では、分散分析の結果として F 値=0.363、有意確率 P=0.548 が示されている。この P 値も統計的有意水準を大きく超えているため、仕事経験の有無が日本人との社会資本強度に統計的に有意な影響を与えるとは断定できない。

(4) 日本人恋人の有無

中国人との社会資本強度得点

Q15 日本人恋人	平均値	度数	標準偏差
いない	18.515	99	2.492
いる	18.400	5	2.881
合計	18.51	104	2.497

表 4-13 日本人恋人報告書 1

Q15 日本人恋人	平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
グループ間 (結合)	0.015	1	0.015	0.010	0.848
グループ内	633.768	102	6.214		
合計	633.782	103			

表 4-14 日本人恋人分散分析表 1

表 4-53 によると、北陸地域で在学中の中国人留学生における、日本人恋人の有無の異なるグループの中国人との社会資本強度得点の平均値は、それぞれ 18.515 (いない)、18.400 (いる) である。また、表 4-54 に示されるように、日本人恋人の有無による中国人との社会資本強度の有意確率は $P=0.848$ であり、この値は統計学的有意水準である 0.05 を上回る。したがって、有無日本恋人が中国人留学生の中国人との社会資本強度に与える影響は統計的に有意ではないと結論付けられる。

日本人との社会資本強度得点

Q15 日本人恋人	平均値	度数	標準偏差
いない	17.838	99	3.171
いる	18.600	5	2.302
合計	17.875	104	3.13

表 4-15 日本人恋人報告書 2

Q15 日本人恋人	平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
グループ間 (結合)	2.769	1	2.769	0.280	0.604
グループ内	1008.540	102	9.889		
合計	1011.309	103			

表 4-16 日本人恋人分散分析表 2

表 4-55 によると、北陸地域で在学中の中国人留学生における、日本人恋人の有無の異なるグループの日本人との社会資本強度得点の平均値は、それぞれ 17.838 (いない)、18.600 (いる) である。表 4-56 に示されるように、日本人恋人の有無による日本人との社会資本強度の有意確率は $P=0.604$ であり、この値は統計学的有意水準である 0.05 を上回る。したがって、有無日本恋人が中国人留学生の日本人との社会資本強度に与える影響は統計的に有意ではないと結論付けられる。しかし、両方のいずれもいるのグループの平均値が高い傾向が見られるが、有意確率に基づいて統計的に確定することはできなかった。この結果は、サンプル数が十分でない可能性があり、さらなる研究が必要であることを示唆している。

(5) 一人っ子調査

中国人との社会資本強度得点

Q18 一人っ子	平均値	度数	標準偏差
はい	18.239	71	2.632
いいえ	19.091	33	2.097
合計	18.51	104	2.497

表 4-17 一人っ子報告書 1

Q18 一人っ子	平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
グループ間 (結合)	13.054	1	13.054	2.663	0.106
グループ内	631.846	102	6.194		

合計	644.900	103			
----	---------	-----	--	--	--

表 4-18 一人っ子分散分析表 1

表 4-65 によると、北陸地域で在学中の中国人留学生における、一人っ子による中国人との社会資本強度得点の平均値は、それぞれ 19.091（いいえ）、18.239（はい）である。また、表 4-66 に示されるように、一人っ子による中国人との社会資本強度の有意確率は $P=0.106$ であり、この値は統計学的有意水準である 0.05 を上回る。したがって、兄弟姉妹の有無が中国人留学生の中国人との社会資本強度に与える影響は統計的に有意ではないと結論付けられる。

日本人との社会資本強度得点

Q18 一人っ子	平均値	度数	標準偏差
はい	17.761	71	3.196
いいえ	18.121	33	3.018
合計	17.875	104	3.13

表 4-19 一人っ子報告書 2

Q18 一人っ子	平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
グループ間 (結合)	5.321	1	5.321	0.297	0.587
グループ内	922.642	102	9.046		
合計	927.963	103			

表 4-20 一人っ子分散分析表 2

表 4-67 によると、北陸地域で在学中の中国人留学生における、一人っ子による日本人との社会資本強度得点の平均値は、それぞれ 18.121（いいえ）、17.761（はい）である。また、表 4-68 に示されるように、一人っ子による日本人との社会資本強度の有意確率は $P=0.587$ であり、この値は統計学的有意水準である 0.05 を上回る。したがって、兄弟姉妹の有無が中国人留学生の日本人との社会資本強度に与える影響は統計的に有意ではないと結論付けられる。

(6) 日本以外の留学経験

中国人との社会資本強度得点

Q19 日本以外留学経験の有無	平均値	度数	標準偏差
あり	19.143	7	2.610
なし	18.464	97	2.496
合計	18.51	104	2.497

表 4-21 日本以外留学経験報告書 1

Q19 日本以外留学経験の有無	平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
グループ間（結合）	2.982	1	2.982	0.480	0.490
グループ内	630.918	102	6.188		
合計	633.900	103			

表 4-22 日本以外留学経験分散分析表 1

表 4-69 によると、北陸地域で在学中の中国人留学生における、日本以外の留学経験の有無による中国人との社会資本強度得点の平均値は、それぞれ 19.143（あり）、18.464（なし）である。また、表 4-70 に示されるように、日本以外の留学経験の有無による中国人との社会資本強度の有意確率は $P=0.490$ であり、この値は統計学的有意水準である 0.05 を上回る。したがって、日本以外の留学経験の有無が中国人留学生の中国人との社会資本強度に与える影響は統計的に有意ではないと結論付けられる。

日本人との社会資本強度得点

Q19 日本以外留学経験の有無	平均値	度数	標準偏差
あり	18.857	7	1.773
なし	17.804	97	3.200
合計	17.875	104	3.13

表 4-23 日本以外留学経験報告書 2

Q19 日本以外留学経験の有無	平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
グループ間（結合）	7.224	1	7.224	0.737	0.393
グループ内	998.739	102	9.787		
合計	1005.963	103			

表 4-24 日本以外留学経験分散分析表 2

表 4-71 によると、北陸地域で在学中の中国人留学生における、日本以外の留学経験の有無による日本人との社会資本強度得点の平均値は、それぞれ 18.857（あり）、17.804（なし）である。また、表 4-72 に示されるように、日本以外の留学経験の有無による日本人との社会資本強度の有意確率は $P=0.393$ であり、この値は統計学的有意水準である 0.05 を上回る。したがって、日本以外の留学経験の有無が中国人留学生の日本人との社会資本強度に与える影響は統計的に有意ではないと結論付けられる。

この結果から、日本以外の留学経験を持つ学生は、持たない学生と比較して、若干高い社会資本強度を持つ傾向があるものの、その影響は統計的に有意ではないと判断される。ただし、留学経験が異文化適応能力や他者との関係構築に潜在的な影響を及ぼす可能性を示唆しており、より多様なサンプルや具体的な交流内容を分析することで新たな知見が得られる可能性がある。

(7) 好きな日本人芸能人

中国人との社会資本強度得点

Q20 好きな日本人芸能人の有無	平均値	度数	標準偏差
いる	19.409	44	2.094
いない	17.850	60	2.576
合計	18.51	104	2.497

表 4-25 好きな日本人芸能人の有無報告書 1

Q20 好きな日本人芸能人の有無	平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
グループ間 (結合)	60.089	1	60.089	10.846	0.001
グループ内	566.915	102	5.557		
合計	627.004	103			

表 4-26 好きな日本人芸能人の有無分散分析表 1

表 4-73 によると、北陸地域で在学中の中国人留学生における、好きな日本人芸能人の有無による中国人との社会資本強度得点の平均値は、それぞれ 19.409 (いる)、17.850 (いない) である。また、表 4-74 に示されるように、好きな日本人芸能人の有無による中国人との社会資本強度の有意確率は $P=0.001$ であり、この値は統計学的有意水準である 0.05 を大きく下回る。したがって、好きな日本人芸能人の有無が中国人留学生の中国人との社会資本強度に与える影響は統計的に高度に有意であると結論付けられる。

日本人との社会資本強度得点

Q20 好きな日本人芸能人の有無	平均値	度数	標準偏差
いる	18.136	44	3.468
いない	17.683	60	2.873

合計	17.875	104	3.13
----	--------	-----	------

表 4-27 好きな日本人芸能人の有無報告書 2

Q20 好きな日本人芸能人の有無	平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
グループ間 (結合)	5.064	1	5.064	0.529	0.469
グループ内	975.157	102	9.562		
合計	980.221	103			

表 4-28 好きな日本人芸能人の有無分散分析表 2

表 4-75 によると、北陸地域で在学中の中国人留学生における、好きな日本人芸能人の有無による日本人との社会資本強度得点の平均値は、それぞれ 18.136 (いる)、17.683 (いない) である。また、表 4-76 に示されるように、好きな日本人芸能人の有無による日本人との社会資本強度の有意確率は $P=0.469$ であり、この値は統計学的有意水準である 0.05 を上回る。したがって、好きな日本人芸能人の有無が中国人留学生の日本人との社会資本強度に与える影響は統計的に有意ではないと結論付けられる。これは、日本人芸能人への興味、中国人留学生の同胞間での話題共有や関係強化に寄与する可能性を示唆しているが、日本人との直接的な関係構築には必ずしもつながらないことを意味していると考えられる。

以下の多重回帰分析による考察では、1 つの表のみを提示しているが、基準カテゴリーの変更によるデータの頑健性の検証を行った。その結果、13 項目の変数において、基準を変更した後も回帰結果の傾向に変化は見られなかった。したがって、データは頑健性を有していると判断できる。

さらに、多重回帰分析を実施した後、統計的に有意な関連が示された変数については、より適切な手法である Spearman の順位相関分析を用いて再検証を行って、結果を記録した。その結果、これらの変数においても相関関係が確認され、回帰分析の結果と一致する傾向が示された。

(1) 出身地

変数	中国人との回帰係数 β	中国人との p 値	日本人との回帰係数 β	日本人との p 値
上海 const	19	0	19	0
雲南	1.5	0.619	2.25	0.533
内モンゴル	0.5	0.879	0.5	0.899
北京	-0.429	0.882	-1.571	0.649
吉林	-0.5	0.879	-3.5	0.377
四川	0.2	0.946	-0.8	0.821
天津	-1	0.793	3	0.512
安徽	0	1	-0.5	0.89
山東	-1.4	0.635	-1.4	0.692
山西	-1	0.762	0	1
広東	-0.75	0.803	-2.25	0.533
広西	1.5	0.649	-2.5	0.528
新疆	0	1	-1	0.788
江蘇	0.4	0.892	-0.6	0.865
江西	2	0.6	2	0.661
河北	-1	0.748	-2	0.592
河南	-2.333	0.454	-2	0.592
浙江	-0.778	0.784	-0.778	0.819
湖北	-3	0.432	-5	0.275
湖南	-0.5	0.879	-1	0.8
甘肅	-1	0.762	-2	0.613
福建	-3	0.432	-3	0.512
貴州	1	0.793	1	0.827
遼寧	-0.667	0.808	-0.75	0.82
陝西	-0.167	0.954	-4.333	0.216
黒竜江	-1.75	0.561	-1.25	0.729

表 4-29 出身地多重回帰分析表

表 4-29 によると、北陸地域で在学中の中国人留学生における出身地別の社会資本強度の平均値には大きな差は見られない。例えば、云南省出身者の中国人社会資本強度の回帰係数は $\beta=1.50$ であり、日本人社会資本強度の回帰係数は $\beta=2.25$ であった。一方、北京市出身者の日本人社会資本強度の回帰係数は $\beta=-1.57$ であり、やや低い傾向が見られるが、いずれの p 値も 0.05 を超えており統計的に有意ではない。また、出身地による社会資本強度の有意確率 (p 値) はすべて 0.05 を上回っており、統計的に有意な影響は認められなかつ

た。したがって、出身地は中国人留学生の社会資本強度に対して統計的に有意な影響を及ぼさないと結論付けられる。

(2) 性格

変数	Spearman 相関係数 (ρ)	p 値 (p-value)	結論
中国人との	0.338	0.00045 ($p < 0.001$)	有意な正の相 関
日本人との	0.281	0.00388 ($p < 0.01$)	有意な正の相 関

表 4-30 性格相関性分析表

表 4-30 に示されるように、性格と中国人との社会資本強度の間には有意な正の相関関係 ($\rho = 0.338$, $p < 0.001$) が認められた。すなわち、性格がより外向的であるほど、中国人との社会資本強度が高い傾向にあることが示唆された。

一方、性格と日本人との社会資本強度の相関関係についても有意な正の相関 ($\rho = 0.281$, $p < 0.01$) が確認されたが、中国人との関係ほど強い相関ではなかった。これは、性格が外向的であることが日本人との社会資本形成にも一定の影響を与えるものの、その効果は中国人との関係ほど顕著ではないことを示唆している。

以上の結果から、外向的な性格は、特に中国人ネットワーク内での社会資本の形成を促進する要因であることが示唆される。日本人との社会資本強度に関しても、外向的な性格が一定の影響を与えている可能性があるが、その影響力は比較的限定的であることが分かった。

(3) 在日年数

変数	Spearman 相関係数 (ρ)	p 値 (p-value)	結論
中国人との	0.113	0.254 ($p > 0.05$)	有意な相関なし
日本人との	0.185	0.060 ($p \approx 0.05$)	有意水準に近いが統計的に 確証なし

表 4-31 在日年数相関性分析表

表 4-31 に示されるように、在日年数と中国人との社会資本強度の間には統計的に有意な相関関係は確認されなかった ($\rho = 0.113$, $p = 0.254$)。つまり、在日年数が長くても、中国人ネットワーク内での社会資本強度には大きな影響を与えない可能性があることが示唆された。

一方で、在日年数と日本人との社会資本強度の間には弱い正の相関関係 ($\rho = 0.185$, $p = 0.060$) が確認された。p 値は 0.05 に近いが、有意水準を満たしていないため、統計的に確証されたとは言えない。しかし、在日年数が長いほど、日本人ネットワーク内での社会資本強度が増加する傾向が示唆されている。これは、在日年数の増加に伴い、日本人との交流機会が増加し、関係性が深化する可能性があることを示している。

以上の結果から、在日年数が日本人との社会資本強度に一定の影響を与える可能性があるが、その効果は限定的であり、さらなる検証が必要である。

(4) 今の在学学歴

変数	中国人との回帰係数 β	中国人との p 値	日本人との回帰係数 β	日本人との p 値
別科生 const	18	0	19.143	0
博士前期	1.087	0.317	-0.839	0.537
博士後期	1.167	0.404	-0.476	0.785

学部生	0.309	0.757	-1.613	0.198
-----	-------	-------	--------	-------

表 4-32 学歴多重回帰分析表

表 4-32 に示されるように、博士前期・博士後期・学部生といった学歴カテゴリーと、中国人・日本人との社会資本強度の関係を分析したが、統計的に有意な影響は確認されなかった。

具体的には、博士前期課程の留学生は、中国人社会資本強度に対して $\beta = 1.087$ ($p = 0.317$) となり、やや高い傾向が見られるものの、統計的に有意ではなかった。また、日本人社会資本強度に関しては、博士前期課程の回帰係数は $\beta = -0.839$ ($p = 0.537$) であり、負の影響があるものの統計的に有意ではないことが分かった。

さらに、博士後期課程の留学生の中国人社会資本強度の回帰係数は $\beta = 1.167$ ($p = 0.404$)、日本人社会資本強度の回帰係数は $\beta = -0.476$ ($p = 0.785$) であり、いずれも統計的に有意な関係は認められなかった。また、学部生に関しても、中国人社会資本強度では $\beta = 0.309$ ($p = 0.757$)、日本人社会資本強度では $\beta = -1.613$ ($p = 0.198$) となり、統計的に有意な影響は見られなかった。以上の結果から、学歴・身分の違いは社会資本強度に大きな影響を与えていないことが示唆された。

(5) 専門

変数	中国人との回帰係数 β	中国人との p 値	日本人との回帰係数 β	日本人との p 値
IT 系 const	18.6	0	18.067	0
文系	-0.114	0.874	-0.364	0.684
理系	-0.067	0.942	0.467	0.686

表 4-33 専門多重回帰分析表

表 4-33 に示されるように、専攻分野と中国人・日本人との社会資本強度の関係について分析を行ったが、統計的に有意な影響は確認されなかった。

具体的には、文系専攻の中国人社会資本強度に対する回帰係数は $\beta = -0.114$ ($p = 0.874$)、日本人社会資本強度に対しては $\beta = -0.364$ ($p = 0.684$) となり、いずれも統計的に有意ではなかった。また、理科専攻の中国人社会資本強度に対する回帰係数は $\beta = -0.067$ ($p = 0.942$)、日本人社会資本強度に対しては $\beta = 0.467$ ($p = 0.686$) となり、こちらも有意な影響は認めら

れなかった。以上の結果から、専攻分野（文科・理科）は中国人・日本人との社会資本強度に大きな影響を及ぼしていないことが明らかになった。

(6) 日本についての事前熟知度

変数	中国人との回帰係数 β	中国との p 値	日本人との回帰係数 β	日本人との p 値
一般的に知っている const	18.154	0	17.288	0
あんまり知らない	0.275	0.785	1.14	0.366
とてもよく知っている	1.418	0.162	1.712	0.176
比較的によく知っている	0.662	0.217	1.08	0.108

表 4-34 日本についての事前熟知度多重回帰分析表

表 4-34 に示されるように、来日前の日本への熟知度（不熟悉・比較熟悉・很熟悉）と中国人・日本人との社会資本強度の関係を分析したが、統計的に有意な影響は確認されなかった。

具体的には、来日前に日本を「あんまり知らない」と回答した留学生の中国人社会資本強度に対する回帰係数は $\beta = 0.275$ ($p=0.785$)、日本人社会資本強度に対する回帰係数は $\beta = 1.140$ ($p=0.366$) であり、いずれも統計的に有意ではなかった。

また、「とてもよく知っている」と回答した留学生の中国人社会資本強度の回帰係数は $\beta = 1.418$ ($p=0.162$)、日本人社会資本強度に対する回帰係数は $\beta = 1.712$ ($p=0.176$) であった。これは、来日前に日本について詳しい留学生の方が社会資本強度が高い傾向にあることを示しているが、統計的には有意ではなかった ($p>0.05$)。

「比較的によく知っている」のカテゴリでは、中国人社会資本強度に対する回帰係数は $\beta = 0.662$ ($p=0.217$)、日本人社会資本強度に対する回帰係数は $\beta = 1.080$ ($p=0.108$) となり、日本人社会資本強度に関してやや高い傾向が見られたものの、統計的に有意とは言え

なかった。以上の結果から、来日前の日本に対する熟知度は、日本人・中国人との社会資本強度に大きな影響を与えていないことが示唆された。

(7) 大学についての事前熟知度

変数	中国人との回帰係数 β	中国人との p 値	日本人との回帰係数 β	日本人との p 値
一般的に知っている const	18.529	0	17.941	0
あんまり知らない	-0.106	0.862	0.213	0.781
とてもよく知っている	0.137	0.928	0.059	0.975
比較的によく知っている	0.012	0.984	-0.525	0.505

表 4-35 大学についての事前熟知度多重回帰分析表

表 4-35 に示されるように、入学前の大学熟知度と中国人・日本人との社会資本強度の関係を分析したが、統計的に有意な影響は確認されなかった。

具体的には、入学前に「あまり知らない」と回答した留学生の中国人社会資本強度に対する回帰係数は $\beta = -0.106$ ($p=0.862$)、日本人社会資本強度に対する回帰係数は $\beta = 0.213$ ($p=0.781$) であり、いずれも統計的に有意ではなかった。

また、「とてもよく知っている」と回答した留学生の中国人社会資本強度の回帰係数は $\beta = 0.137$ ($p=0.928$)、日本人社会資本強度の回帰係数は $\beta = 0.059$ ($p=0.975$) であり、統計的に有意ではなかった。

「比較的によく知っている」のカテゴリでは、中国人社会資本強度に対する回帰係数は $\beta = 0.012$ ($p=0.984$)、日本人社会資本強度に対する回帰係数は $\beta = -0.525$ ($p=0.505$) となり、日本人社会資本強度に関して若干の負の傾向が見られたものの、統計的に有意とは言えなかった。以上の結果から、入学前の大学熟知度は、日本人・中国人との社会資本強度に大きな影響を与えていないことが示唆された。

(8) 来日前の日本語能力

変数	中国人との回帰係数 β	中国人との p 値	日本人との回帰係数 β	日本人との p 値
JLPT1 級 const	18.211	0	17.368	0
JLPT2 級	0.534	0.446	0.306	0.727
JLPT3 級	0.456	0.603	1.298	0.238
JLPT4 級	0.218	0.846	0.06	0.966
JLPT5 級	-1.211	0.387	0.132	0.94
ゼロ基礎	0.289	0.737	1.194	0.269

表 4-36 来日前の日本語能力多重回帰分析表

表 4-36 に示されるように、来日前の日本語レベル（JLPT1 級～JLPT5 級）と中国人・日本人との社会資本強度の関係を分析したが、統計的に有意な影響は確認されなかった。

具体的には、来日前の日本語能力が「JLPT2 級」と回答した留学生の中国人社会資本強度に対する回帰係数は $\beta = 0.534$ ($p = 0.446$)、日本人社会資本強度に対する回帰係数は $\beta = 0.306$ ($p = 0.727$) であり、いずれも統計的に有意ではなかった。また、「JLPT3 級」の中国人社会資本強度の回帰係数は $\beta = 0.456$ ($p = 0.603$)、日本人社会資本強度の回帰係数は $\beta = 1.298$ ($p = 0.238$) であり、日本人社会資本に対してやや高い傾向が見られたものの、統計的に有意ではなかった。「JLPT5 級」のカテゴリでは、中国人社会資本強度に対する回帰係数は $\beta = -1.211$ ($p = 0.387$)、日本人社会資本強度に対する回帰係数は $\beta = 0.132$ ($p = 0.940$) となり、中国人社会資本に対して若干の負の傾向が見られたものの、統計的に有意とは言えなかった。以上の結果から、来日前の日本語能力は、日本人・中国人との社会資本強度に大きな影響を与えていないことが示唆された。

(9) 現在の日本語能力

変数	中国人との回帰係数 β	中国人との p 値	日本人との回帰係数 β	日本人との p 値
JLPT1 級 const	18.667	0	17.771	0
JLPT2 級	-0.077	0.886	0.152	0.824

JLPT3 級	-1.128	0.15	-0.079	0.937
JLPT4 級	2.333	0.196	3.229	0.16
ゼロ基礎	-1.667	0.355	-0.271	0.906

表 4-37 現在の日本語能力多重回帰分析表

表 4-37 に示されるように、現在の日本語レベルと中国人・日本人との社会資本強度の関係を分析したが、統計的に有意な影響は確認されなかった。具体的には、現在の日本語能力が「JLPT2 級」と回答した留学生の中国人社会資本強度に対する回帰係数は $\beta = -0.077$ ($p=0.886$)、日本人社会資本強度に対する回帰係数は $\beta = 0.152$ ($p=0.824$) であり、いずれも統計的に有意ではなかった。

また、「JLPT3 級」の中国人社会資本強度の回帰係数は $\beta = -1.128$ ($p=0.150$)、日本人社会資本強度の回帰係数は $\beta = -0.079$ ($p=0.937$) であり、日本人・中国人社会資本強度に対していずれも統計的に有意ではなかった。

「JLPT4 級」のカテゴリでは、中国人社会資本強度に対する回帰係数は $\beta = 2.333$ ($p=0.196$)、日本人社会資本強度に対する回帰係数は $\beta = 3.229$ ($p=0.160$) となり、日本人社会資本強度に対してやや高い傾向が見られたものの、統計的に有意とは言えなかった。一方、「ゼロ基礎」のカテゴリでは、中国人社会資本強度に対する回帰係数は $\beta = -1.667$ ($p=0.355$)、日本人社会資本強度に対する回帰係数は $\beta = -0.271$ ($p=0.906$) となり、いずれも統計的に有意ではなかった。

以上の結果から、現在の日本語能力は、日本人・中国人との社会資本強度に大きな影響を与えていないことが示唆された。

(10) 留学形態

変数	中国人との回帰係数 β	中国人との p 値	日本人との回帰係数 β	日本人との p 値
公費留学生 const	17.167	0	18.333	0
私費留学生 (奨学金なし)	1.627	0.127	-0.069	0.959
私費留学生	0.967	0.386	-1.433	0.303

(奨学金あり)				
---------	--	--	--	--

表 4-38 留学形態多重回帰分析表

表 4-38 に示されるように、留学形態と中国人・日本人との社会資本強度の関係について分析を行ったが、統計的に有意な影響は確認されなかった。具体的には、私費留学生（奨学金なし）の中国人社会資本強度の回帰係数は $\beta = 1.627$ ($p = 0.127$)、日本人社会資本強度の回帰係数は $\beta = -0.069$ ($p = 0.959$) であった。これは、基準カテゴリーと比較して、中国人社会資本強度においてやや高い傾向が見られるものの、統計的に有意な水準には達していないことを示している。また、私費留学生（奨学金あり）の中国人社会資本強度の回帰係数は $\beta = 0.967$ ($p = 0.386$)、日本人社会資本強度の回帰係数は $\beta = -1.433$ ($p = 0.303$) であった。この結果から、日本人社会資本強度においては負の傾向が示されたものの、統計的に有意とは言えなかった ($p > 0.05$)。

以上の結果を総合すると、留学形態は社会資本強度に対して統計的に有意な影響を与えていないことが示唆される。

(11) バイト時間数

変数	中国人との回帰係数 β	中国人との p 値	日本人との回帰係数 β	日本人との p 値
週 0 時間 const	18.483	0	17.917	0
週 0～6 時間	-1.233	0.195	-0.917	0.446
週 12～18 時間	0.35	0.66	0.167	0.869
週 18 時間以上	0.683	0.527	0.083	0.951
週 6～12 時間	0.239	0.724	0.028	0.974

表 4-39 バイト時間数多重回帰分析表

表 4-39 に示されるように、週当たりの労働時間（週 0 時間～週 18 時間以上）と中国人・日本人との社会資本強度の関係を分析したが、統計的に有意な影響は確認されなかった。

具体的には、「週 0～6 時間」働く留学生の中国人社会資本強度に対する回帰係数は $\beta = -1.233$ ($p = 0.195$)、日本人社会資本強度に対する回帰係数は $\beta = -0.917$ ($p = 0.446$) であり、

統計的に有意な影響は確認されなかった。また、「週 12～18 時間」働く留学生の中国人社会資本強度の回帰係数は $\beta = 0.350$ ($p=0.660$)、日本人社会資本強度の回帰係数は $\beta = 0.167$ ($p=0.869$) であり、日本人・中国人社会資本強度に対して統計的に有意な影響は認められなかった。「週 18 時間以上」のカテゴリでは、中国人社会資本強度に対する回帰係数は $\beta = 0.683$ ($p=0.527$)、日本人社会資本強度に対する回帰係数は $\beta = 0.083$ ($p=0.951$) となり、いずれのグループに対しても有意な影響は確認されなかった。以上の結果から、アルバイトの労働時間は、日本人・中国人との社会資本強度に大きな影響を与えていないことが示唆された。

(12) 固定的交際の日本人数

変数	Spearman 相関係数 (ρ)	p 値 (p-value)	結論
中国人との	0.187	0.057 ($p > 0.05$)	有意な相関なし (だが有意水準に近い)
日本人との	0.206	0.036 ($p < 0.05$)	有意な正の相関

表 4-40 固定的交際の日本人相関性分析表

表 4-40 に示されるように、日本人の友人数と中国人との社会資本強度の間には統計的に有意な相関関係は確認されなかった ($\rho = 0.187$, $p = 0.057$)。しかし、p 値が 0.05 に近いため、一定の関連性がある可能性も示唆される。この結果は、日本人の友人数が中国人ネットワーク内での社会資本強度に直接的な影響を与えないが、一定の関連性を持つ可能性があることを示している。

一方で、日本人の友人数と日本人との社会資本強度の間には 有意な正の相関関係 ($\rho = 0.206$, $p = 0.036$) が確認された。これは、日本人の友人数が増えるほど、日本人との社会資本強度が高まる傾向があることを示している。つまり、日本人の友人関係を構築することは、日本人ネットワーク内での社会資本の形成にとって重要な要素であることが示唆される。以上の結果から、日本人の友人数が増えることで、日本人との社会資本強度が

向上する可能性が示された。一方で、中国人との社会資本強度に対する影響については明確な結論を得ることができなかったが、一定の関連性がある可能性も考えられる。

(13) 社交アプリ使用頻度

変数	中国人との回帰係数 β	中国人との p 値	日本人との回帰係数 β	日本人との p 値
週 6～12 回 const	19.833	0	19.5	0
使用しない	-1.738	0.139	-1.357	0.353
よく使う	-1.363	0.257	-2.088	0.165
週 1～3 回	-1.333	0.221	-1.611	0.236
週 3～6 回	-1	0.493	-3	0.101

表 4-41 社会アプリ使用頻度多重回帰分析表

表 4-41 に示されるように、SNS の利用頻度（使用しない～よく使う）と中国人・日本人との社会資本強度の関係を分析したが、統計的に有意な影響は確認されなかった。具体的には、「SNS を使用しない」グループの中国人社会資本強度に対する回帰係数は $\beta = -1.738$ ($p=0.139$)、日本人社会資本強度に対する回帰係数は $\beta = -1.357$ ($p=0.353$) であった。これは、SNS を使用しない留学生は、SNS を利用する留学生よりも社会資本強度がやや低い傾向にあるが、統計的に有意な影響ではないことを示している。また、「よく使う（高頻度で SNS を利用する）」グループの中国人社会資本強度の回帰係数は $\beta = -1.363$ ($p=0.257$)、日本人社会資本強度の回帰係数は $\beta = -2.088$ ($p=0.165$) であり、日本人社会資本強度においてやや低い傾向が見られたが、統計的に有意ではなかった。「週 3～6 回」SNS を利用するグループの日本人社会資本強度の回帰係数は $\beta = -3.000$ ($p=0.101$) となり、比較的低い傾向が見られたが、統計的有意性 ($p < 0.05$) には達していなかった。以上の結果から、SNS の利用頻度は、中国人・日本人との社会資本強度に統計的に有意な影響を与えていないことが示唆された。

4-1-3 対象者の異文化適応度

(1) 抑うつ状態

調査結果によると、抑鬱状態に関して「軽度の抑うつ性あり」と回答した人が最も多く、46人で全体の44.23%を占めている。次に多かったのは「抑うつ状態はほとんどなし」で42人（40.38%）、続いて「中等度の抑うつ性あり」が10人（9.62%）であった。「うつ病」と診断される状態に該当する人は6人（5.77%）であった。この結果から、調査対象者である中国人留学生の多くは、比較的良好な精神状態を維持していることが示唆される。ただし、一部の対象者が中等度以上の抑うつ状態を示していることから、留学生の心理的健康を支援するための適切な対策や支援体制の必要性も考えられる。本調査結果を基に、調査対象者の抑鬱状態の分布を図4-21に示す。

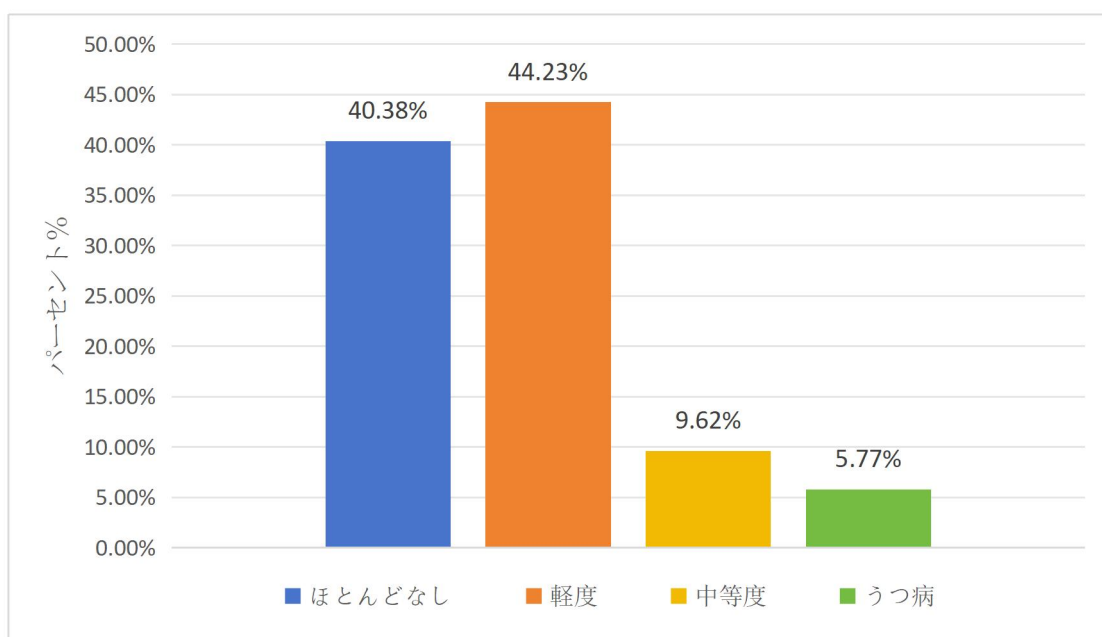


図 4-21 異文化適応統計-抑うつ状態

(2) 社会文化適応状態

調査結果によると、社会文化適応状態に関して「まあまあ困難」と回答した人が最も多く、56人で全体の53.85%を占めている。次に多かったのは「少し困難」で34人（32.69%）、続いて「かなり困難」が13人（12.50%）、「非常に困難」のは1人（0.96%）であった。まったく困難ではない人はいなかった。この結果から、調査対象者である中国人留学生の

多くは、日本の社会文化への適応において何らかの困難を経験していることが明らかとなった。特に「まあまあ困難」または「少し困難」と回答した人が全体の約 86.54%を占めており、日常生活や学業においてある程度の努力や調整を求められていることがうかがえる。一方で、「かなり困難」や「非常に困難」といった深刻な適応困難を経験している人も少数ながら存在しており、特定の状況や背景によっては、留学生がより強いストレスを感じる可能性も示唆される。このことから、日本北陸地区に在学する中国人留学生が社会文化的に適応しやすい環境を整備するため、例えば、日本語能力の向上を支援するプログラムや、異文化理解を深める交流機会を増やすことが重要であると考えられる。本調査結果を基に、調査対象者の社会文化適応状態の分布を図 4-22 に示す。

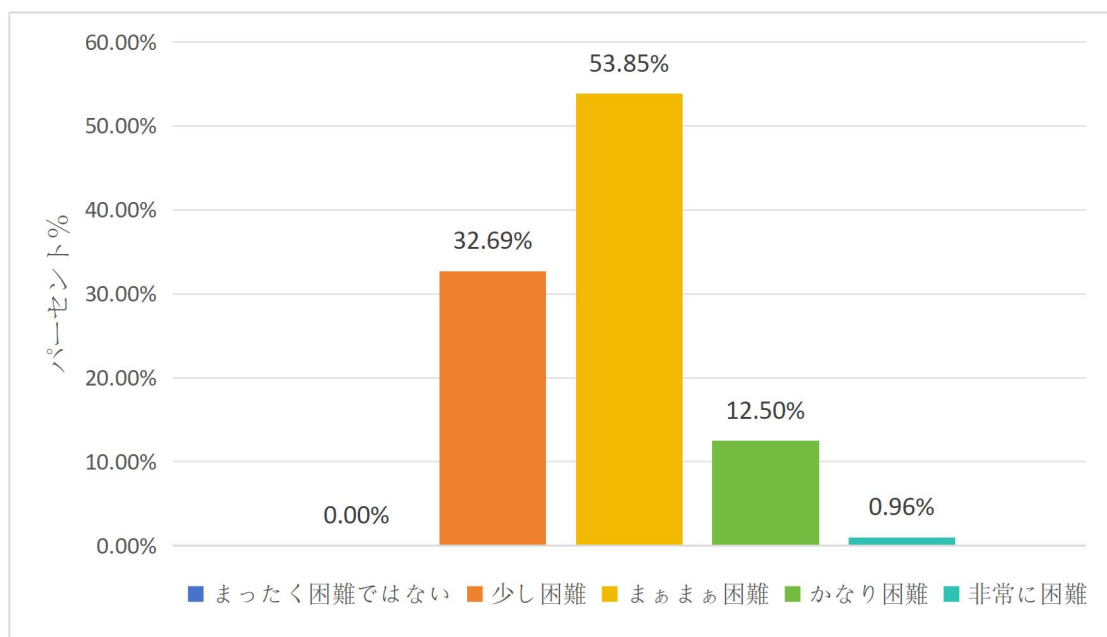


図 4-22 異文化適応統計-社会文化適応状態

4-1-4 異文化適応度と社会資本の関係

以下の多重回帰分析による考察では、1つの表のみを提示しているが、基準カテゴリーの変更によるデータの頑健性の検証を行った。その結果、2項目の変数において、基準を変更

した後も回帰結果の傾向に変化は見られなかった。したがって、データは頑健性を有していると判断できる。

(1) 抑うつ状態による考察

変数	Spearman 相関係数 (ρ)	p 値 (p-value)	結論
中国人との	-0.333	0.00056 ($p < 0.001$)	有意な負の相 関
日本人との	-0.270	0.0055 ($p < 0.01$)	有意な負の相 関

表 4-42 抑うつ状態相関性分析表

表 4-42 に示されるように、抑うつ状態と中国人との社会資本強度の間には有意な負の相関関係 ($\rho = -0.333$, $p < 0.001$) が確認された。つまり、抑うつ傾向が強い留学生ほど、中国人ネットワーク内での社会資本強度が低い傾向があることが示唆された。この結果は、抑うつ状態が社会的交流の頻度や関係の質に影響を及ぼし、結果として中国人ネットワーク内での社会資本の蓄積が阻害される可能性を示している。

一方で、抑うつ状態と日本人との社会資本強度の間にも 有意な負の相関関係 ($\rho = -0.270$, $p < 0.01$) が確認された。ただし、中国人との社会資本強度との関係ほど強くはなく、相関係数の値は比較的低い。この結果は、抑うつ傾向がある場合、日本人とのネットワーク形成にもある程度の影響を与える可能性があるが、中国人ネットワーク内の関係ほど大きな影響はないことを示唆している。

以上の結果から、抑うつ状態は社会資本の形成に対して負の影響を持つ可能性があり、とくに中国人との社会資本強度においてその影響が顕著であることが明らかになった。この傾向は、日本人ネットワークにおいても観察されたが、その影響力は比較的弱い。

(2) 社会文化適応状態による考察

変数	Spearman 相関係数 (ρ)	p 値 (p-value)	結論
中国人との	-0.246	0.0119 ($p < 0.05$)	有意な負の相 関
日本人との	-0.202	0.0393 ($p < 0.05$)	有意な負の相 関

表 4-43 社会文化適応状態相関性分析表

表 4-43 に示されるように、社会文化適応状態と中国人との社会資本強度の間には有意な負の相関関係 ($\rho = -0.246$, $p < 0.05$) が確認された。これは、社会文化適応が困難であるほど、中国人ネットワーク内での社会資本強度が低下する傾向にあることを示唆している。つまり、適応がスムーズに進んでいる留学生は、中国人とのネットワークを活用し、より強い社会資本を形成しやすいことが示された。

一方、社会文化適応状態と日本人との社会資本強度の間にも有意な負の相関関係 ($\rho = -0.202$, $p < 0.05$) が認められたが、中国人ネットワークとの関係ほど強い影響は確認されなかった。この結果は、社会文化適応が困難な留学生は、日本人との関係構築にも一定の障害を抱える可能性があるものの、中国人ネットワークほど大きな影響は及ぼさないことを示している。

以上の結果から、社会文化適応がスムーズな留学生ほど、社会資本をより多く獲得できる傾向があり、とくに中国人ネットワーク内での影響が顕著であることが明らかになった。日本人ネットワークにおいても同様の傾向が見られたが、その影響は比較的弱い。

4-2 半構造インタビューの結果

4-2-1 対人関係の現状と課題

カテゴリー	キーテーマ	課題と障害
対人関係	日本人との友人関係の構	言語能力と文化的背景

	築における初期段階の難しさ。 (6 回)	の違いが障壁となる。
	友人関係の維持におけるコミュニケーション頻度の問題。 (26 回)	日本人の交流頻度の低さと連絡習慣の違い。
	異性との交流に対する文化的期待の相違。 (4 回)	文化的価値観の違いが異性間の交流を難しくする。
	友人を通じて日本社会を深く理解する機会の欠如。 (18 回)	友人を通じた社会経験の不足による文化的疎外感。
	孤独感の解消を目的とした友人関係の重要。 (22 回)	孤独感の克服に向けた支援環境の不足。

表 44 対人関係テーマ分析表

表 89 が示したように、中国人留学生にとって、日本人との友人関係を構築し、維持することは依然として大きな課題である。その要因として、言語能力の不足、文化的背景の相違、交流の機会の限定性などが挙げられる。特に、友人関係の初期段階では、言語の壁が顕著に表れやすく、日常会話や価値観の違いがコミュニケーションを妨げる原因となっている。たとえば、日本語の微妙なニュアンスを理解するのが難しい場合や、日本人特有の間接的な表現が誤解を招くことがある。このような状況下で、留学生は初対面の日本人と関係を築く際に戸惑いを感じる 경우가少なくない。さらに、友人関係が構築されたとしても、それを維持することは別の難題となる。日本人は一般的に頻繁な連絡を避ける傾向があり、これが中国人留学生にとって疎外感の原因となる場合がある。また、異性間の交流における文化的期待の相違も問題を複雑化させる要因の一つである。例えば、中国では異性間の交流が比較的自然であるのに対し、日本では異性間の距離感や接触の仕方に独自の文化的な価値観が存在し、これが相互理解を阻むことがある。加えて、友人を通じて日本社会を深く理解する機会が得られにくいことも、留学生にとって大きな課題である。日本

人との交流が表面的なものにとどまる場合、社会的適応が進まず、結果的に日本文化への理解が限定的になる可能性が高い。そして留学生にとって友人関係は孤独感を解消し、精神的な支えを得るための重要な手段であるにもかかわらず、そのような友人を築くことが容易ではない状況が続いている。これらの課題を解決するためには、交流の場を増やす取り組みが不可欠である。趣味やスポーツ活動を通じたコミュニティ形成や、学校や地域社会による異文化理解イベントの開催は、留学生と日本人の相互理解を深める有効な手段となる。また、留学生自身も積極的に関与し、言語能力や文化理解を向上させる努力が求められる。同時に、日本側も留学生が自然に参加できる環境を整備することが重要であり、双方向のアプローチが必要である。

4-2-2 組織参加の現状と課題

カテゴリー	キーテーマ	課題と障害
組織参加	組織内での役割分担における言語や文化の違い。 (12 回)	言語の違いにより、組織内での役割理解が困難。
	新規メンバーが参加しやすい環境の不足。(18 回)	新しいメンバーを受け入れるためのサポートが不足。
	組織内の活動内容が留学生の興味と一致しない場合の問題。(25 回)	活動の魅力が感じられない場合、参加意欲が低下する。
	日本特有の階層文化や上下関係への適応の難しさ。(8 回)	上下関係や礼儀作法への慣れが求められる。
	短期間の留学中における長期的な組織関与の困難。(4 回)	留学生の滞在期間の制約が長期関与を困難にする

表 45 組織参加テーマ分析表

表 90 が示したように、中国人留学生在日本の組織やサークルに参加する際、さまざまな困難が存在する。その要因として、言語能力の不足、文化的な慣習の違い、時間的制約、組織内での役割の明確性の欠如などが挙げられる。まず、組織内での意思疎通がスムーズに行われない背景には、言語の壁がある。指示やルールが十分に理解されない場合、留学生が組織内で孤立感を覚えることが多く、参加意欲を損なう原因となる。また、日本の組織文化では暗黙のルールや既存メンバーの慣習が重視される傾向があるが、これが新規メンバーとしての留学生にとっては馴染みにくい要因となっている。さらに、組織活動の内容や頻度が留学生の興味や生活状況に合わない場合、参加意欲が低下する傾向が見られる。学業やアルバイトで多忙な留学生にとって、組織活動に十分な時間を割くことは現実的に難しい。このような状況下では、組織への関与が一時的なものにとどまり、留学生が活動を継続的に行うモチベーションを維持するのは困難である。加えて、日本特有の階層文化や上下関係の理解と適応も課題の一つであり、これに従うことが精神的な負担となる場合がある。また、留学生の滞在期間が限られていることも、組織活動への長期的な関与を阻む要因となっている。日本の組織文化では、長期的な信頼関係の構築が重視されるが、留学生にとってはその時間的な余裕がない場合が多い。結果として、組織活動の目的が果たされないまま終わるケースが少なくない。

これらの課題を解決するには、柔軟性のある参加体制を構築することが必要である。たとえば、新規メンバーが気軽に参加できるような環境整備や、多言語対応の案内を提供することが効果的である。また、組織活動の内容を多様化し、留学生が興味を持ちやすいプログラムを導入することも重要である。さらに、既存のメンバーが留学生の参加を支援する仕組みを整えることで、組織内での信頼関係を築きやすくすることが期待される。

4-2-3 異文化コミュニケーションの困難点

カテゴリー	キーテーマ	課題と障害
異文化コミュニケーション	日常生活における小さな文化的な違いから生じるストレス。(22 回)	日常的な細かなルールや慣習に適応する時間が必要。

	日本語の敬語や曖昧な表現の使用への苦手意識。 (14 回)	敬語を適切に使う能力の不足が不安を生む。
	日本人が期待する礼儀や習慣の理解不足による摩擦。 (6 回)	暗黙のルールや期待の理解不足が関係性に影響を与える。
	日本人との共通の話題や趣味の欠如による孤立感。 (19 回)	話題の選択や共通項の欠如がコミュニケーションを阻害する。
	異文化間のユーモアや価値観の相違から生じる誤解。 (12 回)	異文化の背景を理解しないことで不適切な反応が発生する。

表 46 異文化コミュニケーションテーマ分析表

表 91 が示したように、中国人留学生在日本で経験する異文化コミュニケーションには、さまざまな課題が伴う。その主な要因として、言語の壁、文化的価値観の違い、コミュニケーションスタイルの不一致が挙げられる。まず、言語の壁は留学生にとって最も大きな障害の一つである。日本語の敬語や曖昧な表現の使用は、留学生にとって習得が難しい要素であり、誤解や不適切なコミュニケーションを引き起こす原因となっている。特に、日常会話におけるニュアンスの違いが、留学生に不安感や孤立感を与えることが少なくない。また、文化的価値観や社会的期待の違いも重要な課題である。日本社会において重視される「空気を読む」といった暗黙のルールは、外国人留学生にとって理解が難しく、コミュニケーションのハードルを高める要因となる。さらに、日本人が間接的な表現を好む一方で、中国人の直線的なコミュニケーションスタイルとの違いが、交流を妨げる要因として顕在化する場合がある。このような背景から、深いレベルでの交流や信頼関係の構築が困難になることが多い。加えて、異文化間のユーモアや話題の選択における相違も課題として挙げられる。日本人のユーモアや価値観が理解されない場合、コミュニケーションの流れが停滞し、結果的に孤立感を生むことがある。また、日本人が礼儀や習慣を非常に重視するため、留学生が無意識のうちに不適切な行動を取ってしまう場合、相手に不快感を与

えるリスクも存在する。これに加えて、日本人が直接的なフィードバックを避ける傾向があることから、留学生がどのように改善すべきかを理解できないまま問題が放置されるケースも少なくない。こうした課題に対処するためには、相互理解を深める取り組みが必要である。たとえば、言語交換プログラムや文化体験イベントの開催は、留学生と日本人双方にとって有益な学びの場を提供する。これらの活動を通じて、言語や文化に対する理解を深めることが期待される。また、留学生自身も日本文化に対する積極的な学習姿勢を持ち、相手の価値観や行動様式を尊重することが求められる。同時に、日本社会も留学生を受け入れる柔軟な態度を持ち、異文化理解を促進するための支援体制を整えることが重要である。具体的には、学校や地域社会が留学生の生活環境をサポートし、コミュニケーションのギャップを埋めるためのプラットフォームを提供することが挙げられる。このような双方向の努力によって、異文化間の交流はより円滑で有意義なものとなるだろう。

4-2-4 将来の留学へのアドバイスと政策提言

カテゴリー	キーテーマ	課題と障害
留学生への アドバイス と政策提案	日本語や学術能力の向上を目指す必要性。(26回)	留学生が実生活や職場で使用する日本語能力が不足し、試験結果だけに頼ることが不十分。
	異文化適応能力や孤独感克服の重要性。(18回)	異文化環境における孤独感や文化的衝撃への心理的耐性が不足し、適応が困難になる。
	実生活に必要な技能や知識の事前準備の必要性。(12回)	日常生活に必要な知識(医療、交通、銀行など)の不足が生活困難を引き起こす。

	実践的な日本語教育プログラムの導入。(14回)	敬語や日常会話スキルの不足が社会資本形成や信頼関係の構築を妨げている。
	留学生向けメンタルヘルス支援体制の整備。(8回)	孤立感や抑うつ状態が交流頻度の減少を引き起こし、心理的負担が社会適応を阻害する。

表 4-47 アドバイスと政策提言テーマ分析表

表 4-92 が示すように、将来の留学生が日本社会で円滑に適応し、より良い留学体験を得るためには、言語能力、異文化適応、生活準備、心理的支援、そして政策的な取り組みが重要な要素として挙げられる。本研究の結果を踏まえ、それぞれのテーマに基づく具体的な提言を以下に述べる。

まずは日本語や学術能力の向上は、留学生が日本社会で信頼関係を構築し、学術的・職業的な成功を収めるために不可欠である。特に、敬語や日常会話スキルの不足は、社会資本形成の大きな障壁となる。試験での高得点を取得するだけでなく、実生活や職場での実用的な日本語能力を高める必要がある。この課題を解決するために、ロールプレイ形式やシナリオベースの実践的な日本語教育プログラムの導入が有効であると考えられる。

次に、異文化適応能力の向上と孤独感克服の重要性が挙げられる。留学生は異文化環境における孤独感や文化的衝撃に直面しやすく、これが心理的負担となり、適応を阻害することが多い。このため、リラクゼーション法や時間管理スキルを学ぶストレス軽減プログラムの実施、そして母国語で相談できるメンタルヘルスカウンセリングサービスの提供が求められる。これにより、心理的負担を軽減し、留学生の精神的な健康を支える環境を整えることができる。また、実生活に必要な技能や知識の事前準備も重要なテーマである。留学生が日本で直面する日常的な課題として、医療、交通、銀行業務に関する知識の不足が挙げられる。これらの基礎的な知識を留学前に学ぶことで、生活の不便やストレスを軽減できる。特に、新入留学生向けのオリエンテーションやガイドラインの作成は、生活適応を加速させる上で効果的である。

さらに、実践的な日本語教育プログラムの導入は、言語的障壁を克服し、社会資本形成を促進するために重要な施策である。留学生が日本社会での交流を通じて信頼関係を構築しやすくするためには、実践的な教育が必要である。具体的には、日常会話や職場でのコミュニケーションに焦点を当てたプログラムが効果的である。

最後に、留学生向けのメンタルヘルス支援体制の整備が必要である。孤立感や抑うつ状態は、交流頻度の減少を引き起こし、社会適応を妨げる大きな要因となる。心理的健康を支援する体制を強化することで、留学生の安心感を高め、より豊かな交流機会を提供することが可能である。

これらの提案は、留学生が日本社会での生活をよりスムーズに送り、多文化共生社会の実現に貢献するための具体的な指針である。本研究を通じて得られた知見をもとに、留学生の適応環境の改善に向けた取り組みが一層推進されることが期待される。

第5章 考察

北陸地域における中国人留学生の社会資本形成について、本章では促進要因と阻害要因に焦点を当て、それぞれの要因が具体的にどのように影響を及ぼすかを考察する。これにより、留学生支援策の改善および多文化共生社会の構築に資する示唆を得ることを目指す。

5-1 社会資本形成を促進する要因

性格特性や行動の積極性、さらには社会的環境の多様性が、社会資本形成を大きく促進する要因として挙げられる。第4章の分析では、外向的な性格を持つ留学生が、日本人および中国人との社会資本強度が内向的な留学生よりも高いことが明らかになった。外向的な性格は新しい人間関係の形成を促進し、積極的な交流を通じて信頼関係を構築する助けとなる。このことから、性格特性が社会資本形成において重要な役割を果たしていることが分かる。文化的多様性に富んだ環境への参加も、社会資本形成に重要な役割を果たす。第4章では、留学生が多文化的なイベントや活動に参加することで、異なる文化背景を持つ人々との交流が深まり、社会的ネットワークが拡大したことが示された。多文化交流の機会は、多様な背景を持つ人々とのつながりを強化し、異文化環境への適応をスムーズに

する要因として機能している。明確な目標を持つ活動への参加も、社会資本形成の促進に寄与している。例えば、スポーツやボランティア活動など、共通の目標を共有するグループへの参加は、個人間の信頼を深めると同時に、協力的なネットワークの形成を可能にする。このような活動は、社会的スキルを習得する機会を提供し、地域社会への適応を後押しする重要な役割を果たしている。

さらに、家族や既存の友人関係も重要な役割を果たしている。母国からの心理的支援や既存のネットワークを活用することは、留学生にとって精神的な安定感をもたらし、新しい人間関係を築く意欲を高める要因となる。心理的安定性を確保することで、異文化環境での挑戦に対するレジリエンスが向上し、社会資本形成に積極的に取り組むことが可能になる。留学生自身の積極性や行動力も社会資本形成に大きな影響を与える。イベントや活動に自発的に参加することで、多くの人々と接点を持ち、信頼関係を構築できるという結果が見られる。受け身ではなく自発的な行動が、より多様で強固な社会資本の形成を促進する鍵となる。

5-2 社会資本形成を阻害する要因

一方、社会資本形成を阻害する要因として心理的健康状態が挙げられる。第4章では、抑うつ状態が深刻化するほど他者との交流意欲が低下し、孤立感が強まる傾向が観察された（図4-21）。この結果は、心理的健康が社会資本形成において不可欠な基盤であることを示している。特に、新しい環境への適応に伴うストレスは、社会的交流を制限する大きな要因となり得る。

言語能力の不足も大きな障壁となる。日本語能力が低い留学生は、日常生活や学術的場面での意思疎通に苦勞しており、意思疎通が難しい状況は、信頼関係の構築を阻害する要因となる。言語的な壁が、交流の継続を困難にし、新しい人間関係の形成を妨げていることが確認されている。文化的な相違と適応の難しさも阻害要因の一つである。日本社会における暗黙のルールやコミュニケーションスタイルへの理解不足は、誤解や摩擦の原因となり、留学生にとって文化的距離感を感じさせる要因となる。また、日本人との交流が控えめであることや、連絡頻度の違いが、関係構築を困難にする要素となり得る。

社会的支援の不足も大きな阻害要因である。新しいメンバーへの案内や組織内でのサポート体制の不備は、組織活動への参加意欲を低下させ、メンバー間の一体感の形成を妨げ

る。このような状況では、留学生が孤立しやすくなり、社会資本形成が停滞するリスクが高まる。外部環境の制約も留学生の活動参加を妨げる要因である。地理的な制約や移動手段の不足が原因で、地域イベントや組織活動への参加が難しい場合、社会資本の形成における機会損失が生じる。また、社会的孤立の連鎖も大きな問題として浮上しており、孤立感が新たな人間関係の構築をさらに困難にする悪循環が確認されている。これらの阻害要因を克服するためには、心理的サポートや言語能力向上プログラム、多文化交流を促進する環境整備が必要である。また、家族や既存の友人ネットワークを活用して心理的安定性を高め、新しい社会資本構築を支援する仕組みを整えることが重要である。地域社会や大学が共同して支援体制を強化し、留学生が孤立することなく多様な社会資本を築けるよう取り組む必要がある。

本章では、北陸地域における中国人留学生の社会資本形成を促進する要因と阻害する要因について考察した。これらの知見は、教育機関や地方自治体がより効果的な支援策を設計するための基盤となると同時に、異文化間の理解と多文化共生の促進にも寄与するものである。今後は、具体的な支援策の提案や他地域での比較研究を通じて、さらなる知見を得ることが期待される。

第 6 章 結論

6-1 研究のまとめ

本研究では、北陸地域における中国人留学生の社会資本形成に影響を与える促進要因および阻害要因を明らかにすることを目的とし、以下の研究課題に基づいて分析を行った。

MR0：中国人留学生が社会資本を構築する際に影響を与える要素の探究。

SR01：個人属性と異文化適応が構成する社会資本に与える影響の分析。

SR02：異文化コミュニケーションにおける困難が社会資本の構築に与える影響の探究。

これらの研究課題に基づき、アンケート調査および半構造インタビューを通じて得られた知見を以下にまとめる。

本研究の主要な目的である、北陸地域における中国人留学生の社会資本形成に影響を与える要素については、以下のことが明らかになった。

社会資本形成における促進要因として、個人の外向的性格や積極的な行動、学校や地域社会による支援の重要性が示された。特に、言語講座や文化交流活動などの環境要因は、留学生が異文化環境で新たなネットワークを構築する上で有効であることが確認された。阻害要因として、言語的・文化的障壁および心理的健康問題が挙げられる。特に、敬語や日本社会特有の暗黙のルールに対する不慣れが、社会資本形成を妨げる主な要因となっている。また、短期滞在の留学生は、日本人との深い関係構築に必要な時間が不足し、社会資本形成が限定的である傾向がある。これらの結果から、社会資本形成には個人の特性だけでなく、外部環境や制度的な支援が重要な役割を果たすことが示唆された。

次に、個人属性および異文化適応が社会資本に与える影響について分析した結果、以下の知見が得られた。

外向的な性格を持つ留学生は、日本人および同胞との社会資本強度が内向的な留学生よりも高いことが確認された。これは、外向的な性格が積極的な交流を促進し、新しい人間関係の形成を容易にするためと考えられる。また、インタビューの結果から、積極的に文化イベントや学術活動に参加する留学生は、多様な社会ネットワークを構築する傾向があることも示された。また、異文化適応の進捗が社会資本の強度に直接的な影響を与えることが明らかになった。特に、心理的適応および社会文化的適応が進んでいる留学生ほど、異文化環境での信頼関係構築が容易になることが確認された。これらの結果は、個人の性格特性や異文化適応能力が、社会資本の形成において重要な役割を果たしていることを示している。

最後に、異文化コミュニケーションにおける困難が社会資本の構築に与える影響については、以下のような知見が得られた。

言語的障壁が留学生の社会資本形成において大きな阻害要因となっていることが確認された。特に、敬語や曖昧な表現の使用に対する不安感が、日本人とのコミュニケーションを妨げ、信頼関係の構築を困難にしている。文化的距離感が交流の障壁となり、異文化適応に影響を与えていることが明らかになった。日本特有の暗黙のルールや階層文化に適応することが難しい場合、組織活動や地域イベントへの参加意欲が低下する傾向がある。また、心理的健康問題が社会資本形成を阻害する主要な要因であることも示された。抑うつ状態やストレスが交流の頻度を減少させ、孤立感を強めることが確認された。これらの結

果は、異文化コミュニケーションにおける困難が、社会資本の形成を妨げる複合的な要因として働いていることを示唆している。

以上の結果から、北陸地域における中国人留学生の社会資本形成においては、個人の特性や異文化適応能力、外部環境の支援が重要な役割を果たしていることが明らかになった。一方で、言語的・文化的障壁や心理的健康問題が主要な阻害要因として留学生の適応を妨げる要因となっている。本研究の知見は、留学生支援策の改善および多文化共生社会の構築に向けた貴重な示唆を提供するものである。

インタビューの過程でもう一つ明らかになったのは、学生が社交活動において相手の反応や自身の行動に対する評価を非常に気にしている点である。具体的には、ポジティブな反応を得た場合には、より積極的に行動する傾向が見られる一方で、ネガティブな反応を受けると、徐々に消極的になり、行動が制限されていく傾向がある。

6-1-1 教育および政策の提言

本研究の成果を踏まえ、北陸地域における中国人留学生の社会資本形成を支援するため、以下の教育および政策的提言を行う。

まずは言語教育と文化適応支援の強化。本研究では、言語的・文化的障壁が社会資本形成を阻害する主な要因であることが明らかになった。特に敬語の使用や暗黙のルールへの不慣れが、信頼関係構築を妨げている。この課題を克服するため、以下の施策を提案する。
実践的な日本語教育プログラムの導入：留学生が日常生活や職場で使用する言語スキルを向上させるため、ロールプレイやシナリオベースの学習を含む実践的なプログラムを開発する。
文化適応ワークショップの実施：日本の社会慣習やコミュニケーションスタイルについて学ぶ場を設け、異文化間の理解を深める。

次は心理的健康サポートの充実。テーマ分析によると、心理的健康問題が留学生の社会資本形成を阻害する大きな要因であることが確認された。特に抑うつ状態や孤立感が交流頻度の減少を引き起こしている。この課題に対応するため、以下の施策を提案する。
留学生向けのメンタルヘルスカウンセリングサービスの提供：母国語で相談できるカウンセラーを配置し、留学生の心理的負担を軽減する。
ストレス軽減プログラムの実施：リラクゼ

ーション法や時間管理スキルを学ぶワークショップを開催し、留学生のストレスを緩和する。

最後は短期滞在者向けの交流機会の拡充。短期滞在留学生が日本人との深い関係を構築する機会が限られていることが指摘された（第4章参照）。この課題を解決するため、以下の施策を提案する。短期集中型の文化交流プログラムの提供：地域イベントや異文化体験を通じて、短期間でも濃密な交流ができるプログラムを設計する。ペア活動の推進：日本人学生と留学生をペアにして共同作業やプロジェクトを行うことで、相互理解を深める。

以上の提言は、北陸地域における中国人留学生が社会資本を形成しやすい環境を整備するための具体的な方策であり、多文化共生社会の実現に寄与するものである。

6-2 今後の研究課題

本研究を通じて、中国人留学生の社会資本形成に関する重要な知見を得ることができたが、いくつかの課題が未解決のままである。これを踏まえ、今後の研究課題として以下の四点を挙げる。

まずは、社会資本測量アンケートの改良が必要である。本研究では、中国人留学生の社会資本を測定するために既存の中国人向け問巻を用いたが、日本文化や日本特有の交流様式を十分に反映した内容にはなっていない。例えば、中国人留学生が「入郷随俗」のように日本文化に適応し、日本人特有の間接的かつ形式的なコミュニケーションスタイルを採用するケースが多いが、既存の問巻ではこうした側面を十分に捉えられていない可能性がある。本研究のアンケート結果およびインタビューから得られた知見を基に、日本文化の影響を考慮した測量項目を追加する必要がある。

次に、地域間の比較研究が重要である。本研究は北陸地域の中国人留学生を対象としており、その結果はこの地域の特性を強く反映している。他地域における中国人留学生の社会資本形成を調査することで、地域ごとの特性や共通点を明らかにすることができる。関東や関西といった国際化が進んでいる都市部と、東北や九州など地方都市との比較を通じて、地域特性の違いを検証する必要がある。また、北陸地域の結果が全国的な傾向と一致しているかを確認することも意義がある。

また、長期滞在者と短期滞在者の比較分析が必要である。インタビュー結果から、留学期間の長短が社会資本形成や適応行動に影響を与える可能性が示唆された。長期滞在者は地域社会に深く溶け込み、持続的かつ密接な人間関係を構築する傾向がある。一方で、短期滞在者は短期間で効率的かつ実用的な交流を求める傾向が見られる。滞在期間による行動様式や意欲の違いを定量的に分析し、それぞれに応じた支援策を検討することが求められる。

最後は、社会資本の長期形成過程を明らかにする研究が必要である。本研究は短期間で収集したデータを基に、既に形成されている社会資本の結果を分析している。しかし、社会資本は短期的に形成されるものではなく、長期間にわたる持続的な活動や関係性の積み重ねによって構築されるものである。留学初期、中期、後期の各段階で社会資本がどのように構築され、異文化適応にどのように寄与するかを追跡する研究が求められる。長期的な視点を取り入れることで、社会資本の動態的な変化をより深く理解することが可能となる。

これらの課題に取り組むことで、中国人留学生の社会資本形成に関する理解が一層進み、具体的かつ効果的な支援策の設計につながると期待される。

参考文献

- [1] 辺燕傑 (2020) 「社会資本与大衆体育」[J]『上海体育学院学報』2020, 44 (4) , pp. 1-11, 上海体育学院。
- [2] 陳家宝、劉歡、彭青和 (2024) 「来華留学生感知社会支持与抑鬱の關係：跨文化適應压力与対応方式の連鎖的媒介作用」[J]『福建医科大学学報 (社会科学版)』2024, 25 (5), pp. 27-32。
- [3] 陳俊シン (2020) 「家庭資本对留学生社会文化適應的影響研究—以中国在英 90 後修士留学生為例」西安外国語大学 修士論文。
- [4] 崔元起、樓超華 (2019) 「關於社会資本及其測量的總述」[J]『健康教育与健康促進』2019, 14 (3) , pp. 12-23, 上海市衛生健康委員會。
- [5] 鄧秀軍、董筱姍、別明蔚 (2024) 「短視頻社交可供性影響下在華外国留学生的跨文化適應与地方依恋」[J]『中国新聞傳播研究』2024, 11 (3) , pp. 25-48。
- [6] 郝朝暉、艾則孜 (2013) 「論社会資本对高等教育公平的影響」[J]『新疆社会科学』2013, 2, pp. 55-59, 新疆社科院雜誌社。
- [7] 林南 (2020) 「從個人走向社会：一個社会資本的視角」[J]『社会科学戰線』2020, 2, 吉林省社会科学院。
- [8] 劉麗英 (2016) 「中国の大学における日本人教師の異文化適應—一個体特性の視点から」北京外国語大学 修士論文。
- [9] 劉茜、周穎、方楠楠 (2023) 「社交媒体使用如何影響東盟来華留学生的跨文化適應—基于社会資本中介作用的考察」[J]『華夏傳播研究』2023, 厦門大学出版社。
- [10] 宋祖豪 (2021) 「帕特南社会資本理論研究」遼寧師範大学 修士論文。
- [11] 唐順敏 (2015) 「与中国人交友—桂林尼泊爾留学生跨文化人際交往適應研究」[J]『外国语言学及応用语言学研究』2015, 5 (2) , pp. 45-68。
- [12] 孫千惠 (2024) 「國際中文教育視角下留学生跨文化適應研究—基于霍夫斯泰德文化維度理論」[J]『天津中德応用技術大学学報』2024, 5 (62) , pp. 92-96。
- [13] 徐康葉、羅楊 (2024) 「来華留学生跨文化適應問題与对策研究」[J]『國際公関』2024, 17 (40) , pp. 141-144。

- [14] 楊延忠、張超 (2010) 「社会資本視角下的公共衛生」[J]『中華預防醫學雜誌』2010, 44 (3) , pp. 12-20。
- [15] 余璐 (2021) 「社会資本視角下的『一帶一路』沿線国家来華留学生的跨文化適應」[J]『湖南工業職業技術學院學報』2021, 21 (6) , pp. 78-85。
- [16] 張帥 (2023) 「数字跨国：中国留英学生网络社会支持獲取研究」北京外國語大學 博士論文。
- [17] 謝利燕、袁樂文、陳曉雨、龔薇、王盼弟、孫靜 (2023) 「大学生抑鬱症与社会資本的關係」[J]『Journal of Campus Life & Mental Health』2023, 21 (6) , 安徽医科大学看護學院。
- [18] 郭佳佳 (2013) 「文化距离、文化认同对跨文化适应的影响—基于个体社会資本的研究」浙江大學 修士論文
- [19] 高井次郎 (1989) 「在日外国人留学生の适应研究の总结」[J]『名古屋大學教育學部紀要 (教育心理學科) 』1989, 36, pp. 139-147。
- [20] Berry, J. W. (1997). 「Immigration, acculturation, and adaptation」[J]『Journal of Cross-Cultural Psychology』, 46(1), pp. 5-34.
- [21] Bourdieu, P. (1986). 「The forms of capital」[M] // J. Richardson (Ed.), 『Handbook of Theory and Research for the Sociology of Education』. New York: MacMillan.
- [22] Burt, R. S. (2000). 「The network structure of social capital」[J]『Research in Organization Behavior』, 22, pp. 345-423.
- [23] Coleman, J. S. (1988). 「Social capital in the creation of human capital」[J]『American Journal of Sociology』, 94, pp. S95-S120.
- [24] De Silva, M. J., Harpham, T., Tuan, T., et al. (2006). 「Psychometric and cognitive validation of a social capital measurement tool in Peru and Vietnam」[J]『Social Science & Medicine』, 62(4), pp. 941-953.
- [25] Gullahorn, J., & Gullahorn, J. E. (1963). 「An extension of the U-curve hypothesis」[J]『Journal of Social Issues』, 19, pp. 33-47.

- [26] Gullahorn, S. (1955). 「Adjustment in a foreign society: Norwegian Fulbright grantees visiting the United States」 [J] 『International Social Science Bulletin』 , 7, pp.45-51.
- [27] Grootaert, C., Narayan, D., & Jones, V. N. (2003). 『Measuring Social Capital - An Integrated Questionnaire』 [R]. Washington DC: The World Bank.
- [28] Harpham, T., Grant, E., & Thomas, S. (2002). 「Measuring social capital within health surveys: Key issues」 [J] 『Health Policy and Planning』 , 17(1), pp.106-111.
- [29] Lochner, K., Kawachi, I., & Bruce, P. (1999). 「Social capital: A guide to its measurement」 [J] 『Health Place』 , 5, pp.259-270.
- [30] Lin, N. (1999). 「Social networks and status attainment」 [J] 『Annual Review of Sociology』 , 25, pp.467-487.
- [31] Lin, N. (2001). 『Social Capital: A Theory of Structure and Action』 [M]. London: Cambridge University Press.
- [32] Putnam, R. D. (1995). 『Making Democracy Work: Civic Traditions in Modern Italy』 [M]. Princeton: New Jersey University Press.
- [33] Searle, W., & Ward, C. (1990). 「The prediction of psychological and sociocultural adjustment during cross-cultural transitions」 [J] 『International Journal of Intercultural Relations』 , 14(6), pp.449-464.

付録1 アンケート質問票

北陸地域における中国人留学生の社会関係資本の形成に関する調査

本調査は3つのセクション、全5ページ、計98問で構成されています。回答には10～15分程度かかる見込みです。アンケートへのご協力、誠にありがとうございます。

I. 個人属性 (21 問)

1. あなたの性別は？【単一選択】

- ☐ 男性
- ☐ 女性

2. あなたの年齢は？【記述式】

3. あなたが所属する大学は？【単一選択】

- ☐ 北陸大学
- ☐ 北陸先端科学技術大学院大学 (JAIST)
- ☐ 金沢大学
- ☐ 金沢美術工芸大学
- ☐ その他 (具体的に記入)

4. 出身地はどこですか？ (省まで記入してください) 【記述式】

5. あなたの性格について、最も当てはまるものを選んでください。【単一選択】

- ☐ とても外向的
- ☐ やや外向的
- ☐ どちらともいえない
- ☐ やや内向的
- ☐ とても内向的

6. 日本に滞在している期間はどのくらいですか？【単一選択】

- ☐ 1 年未満

- ☐ 1～2 年
- ☐ 2～3 年
- ☐ 3 年以上

7. 現在の身分は？【単一選択】

- ☐ 別科生
- ☐ 学部生
- ☐ 修士課程（博士前期課程）
- ☐ 博士課程（博士後期課程）

8. 来日前に職務経験がありますか？【単一選択】

- ☐ ある
- ☐ ない

9. 専攻分野は？【単一選択】

- ☐ 文系
- ☐ 理系
- ☐ IT

10. 来日前、日本という国についてどの程度知っていましたか？【単一選択】

- ☐ よく知っていた
- ☐ ある程度知っていた
- ☐ 普通
- ☐ あまり知らなかった

11. 大学入学前、大学生活についてどの程度理解していましたか？【単一選択】

- ☐ よく知っていた
- ☐ ある程度知っていた
- ☐ 普通
- ☐ あまり知らなかった

12. 来日前の日本語能力は？（JLPT レベル）【単一選択】

- ☐ JLPT N1
- ☐ JLPT N2
- ☐ JLPT N3

- ☐ JLPT N4
- ☐ JLPT N5
- ☐ 初学者（ゼロから）

13. 現在の日本語能力は？（JLPT レベル）【単一選択】

- ☐ JLPT N1
- ☐ JLPT N2
- ☐ JLPT N3
- ☐ JLPT N4
- ☐ JLPT N5
- ☐ 初学者（ゼロから）

14. 留学形態は？【単一選択】

- ☐ 私費留学生（奨学金なし）
- ☐ 私費留学生（奨学金あり）
- ☐ 国費留学生
- ☐ その他（具体的に記入）

15. 日本人の恋人がいますか？【単一選択】

- ☐ はい
- ☐ いいえ

16. アルバイトの平均週勤務時間は？【単一選択】

- ☐ 0 時間
- ☐ 0～6 時間
- ☐ 6～12 時間
- ☐ 12～18 時間
- ☐ 18 時間以上

17. 親しく交流している日本人の友人の人数は？【単一選択】

- ☐ いない
- ☐ 1 人
- ☐ 2 人
- ☐ 3 人

☐ 3人以上

18. 兄弟姉妹がいますか？【単一選択】

☐ はい

☐ いいえ

19. 日本以外での留学経験がありますか？【単一選択】

☐ はい

☐ いいえ

20. 好きな日本の芸能人がいますか？【単一選択】

☐ はい

☐ いいえ

21. 日本の SNS（LINE、Instagram など）の使用頻度は？【単一選択】

☐ 全く使わない

☐ 週 1～3 回

☐ 週 3～6 回

☐ 週 6～12 回

☐ ほぼ毎日使う

Ⅱ. 異文化適応 - 心理的適応（20 問）

22. 気分が沈んだり、憂鬱な気持ちになることがありますか？【単一選択】

☐ ほとんどない

☐ 時々ある

☐ しばしばある

☐ ほぼいつも

23. 朝に最も気分が良いと感じますか？【単一選択】

☐ ほとんどない

☐ 時々ある

☐ しばしばある

☐ ほぼいつも

24. 泣きたくなったり、実際に泣いてしまうことがありますか？【単一選択】

- ☐ ○ ほとんどない
- ☐ ○ 時々ある
- ☐ ○ しばしばある
- ☐ ○ ほぼいつも

25. 睡眠の質が悪いと感じることがありますか？【単一選択】

- ☐ ○ ほとんどない
- ☐ ○ 時々ある
- ☐ ○ しばしばある
- ☐ ○ ほぼいつも

26. 食事の量が普段と変わりませんか？【単一選択】

- ☐ ○ ほとんどない
- ☐ ○ 時々ある
- ☐ ○ しばしばある
- ☐ ○ ほぼいつも

27. 体重が減ったと感じますか？【単一選択】

- ☐ ○ ほとんどない
- ☐ ○ 時々ある
- ☐ ○ しばしばある
- ☐ ○ ほぼいつも

28. 便秘に悩まされることがありますか？【単一選択】

- ☐ ○ ほとんどない
- ☐ ○ 時々ある
- ☐ ○ しばしばある
- ☐ ○ ほぼいつも

29. 普段より心拍数が速くなると感じることはありますか？【単一選択】

- ☐ ○ ほとんどない
- ☐ ○ 時々ある
- ☐ ○ しばしばある
- ☐ ○ ほぼいつも

30. 注意力の確認テスト：必ず「しばしばある」を選択してください。【単一選択】

- ☐ ほとんどない
- ☐ 時々ある
- ☐ しばしばある
- ☐ ほぼいつも

31. 特に理由もなく疲れやすいと感じますか？【単一選択】

- ☐ ほとんどない
- ☐ 時々ある
- ☐ しばしばある
- ☐ ほぼいつも

32. 頭の働きが普段と変わらないと感じますか？【単一選択】

- ☐ ほとんどない
- ☐ 時々ある
- ☐ しばしばある
- ☐ ほぼいつも

33. 普段と同じように物事を難なくこなせますか？【単一選択】

- ☐ ほとんどない
- ☐ 時々ある
- ☐ しばしばある
- ☐ ほぼいつも

34. 落ち着かず、そわそわすることがありますか？【単一選択】

- ☐ ほとんどない
- ☐ 時々ある
- ☐ しばしばある
- ☐ ほぼいつも

35. 将来に希望を持っていますか？【単一選択】

- ☐ ほとんどない
- ☐ 時々ある
- ☐ しばしばある
- ☐ ほぼいつも

36. 普段より怒りっぽくなったと感じますか？【単一選択】

- ☐ ほとんどない
- ☐ 時々ある
- ☐ しばしばある
- ☐ ほぼいつも

37. 物事を決めるのが簡単だと感じますか？【単一選択】

- ☐ ほとんどない
- ☐ 時々ある
- ☐ しばしばある
- ☐ ほぼいつも

38. 自分が役に立つ存在だと感じますか？【単一選択】

- ☐ ほとんどない
- ☐ 時々ある
- ☐ しばしばある
- ☐ ほぼいつも

39. 人生を楽しんでいると感じますか？【単一選択】

- ☐ ほとんどない
- ☐ 時々ある
- ☐ しばしばある
- ☐ ほぼいつも

40. 自分がいなくなった方が周囲の人が幸せになると感じますか？【単一選択】

- ☐ ほとんどない
- ☐ 時々ある
- ☐ しばしばある
- ☐ ほぼいつも

41. 以前好きだったものを今でも楽しめますか？【単一選択】

- ☐ ほとんどない
- ☐ 時々ある
- ☐ しばしばある

- ☐ ほぼいつも

Ⅲ. 異文化適応 - 社会文化的適応 (33 問)

42. 日本人の友人を作り、それを維持することはどの程度難しいと感じますか？【単一選択】

- ☐ 全く難しくない
☐ やや難しい
☐ 普通
☐ かなり難しい
☐ 非常に難しい

43. 自分が好む食べ物を見つけることはどの程度難しいですか？【単一選択】

- ☐ 全く難しくない
☐ やや難しい
☐ 普通
☐ かなり難しい
☐ 非常に難しい

44. 日本の規則やルールを守ることはどの程度難しいですか？【単一選択】

- ☐ 全く難しくない
☐ やや難しい
☐ 普通
☐ かなり難しい
☐ 非常に難しい

45. 職場の上司など権威のある人と付き合うことはどの程度難しいですか？【単一選択】

- ☐ 全く難しくない
☐ やや難しい
☐ 普通
☐ かなり難しい
☐ 非常に難しい

46. 日本の役所や大使館とやり取りすることはどの程度難しいですか？【単一選択】

- ☐ 全く難しくない
☐ やや難しい
☐ 普通

- ☐ かなり難しい
- ☐ 非常に難しい

47. 日本の交通機関を利用することはどの程度難しいですか？【単一選択】

- ☐ 全く難しくない
- ☐ やや難しい
- ☐ 普通
- ☐ かなり難しい
- ☐ 非常に難しい

48. 日本文化を理解することはどの程度難しいですか？【単一選択】

- ☐ 全く難しくない
- ☐ やや難しい
- ☐ 普通
- ☐ かなり難しい
- ☐ 非常に難しい

49. 日本人の価値観や世界観を理解することはどの程度難しいですか？【単一選択】

- ☐ 全く難しくない
- ☐ やや難しい
- ☐ 普通
- ☐ かなり難しい
- ☐ 非常に難しい

50. 日本人に自分の考えや行動を理解してもらうことはどの程度難しいですか？【単一選択】

- ☐ 全く難しくない
- ☐ やや難しい
- ☐ 普通
- ☐ かなり難しい
- ☐ 非常に難しい

51. 銀行、通信、郵便局のサービスを利用することはどの程度難しいですか？【単一選択】

- ☐ 全く難しくない
- ☐ やや難しい
- ☐ 普通

- ☐ かなり難しい
- ☐ 非常に難しい

52. 日本の商店やショッピングモールで買い物をすることはどの程度難しいですか？【単一選択】

- ☐ 全く難しくない
- ☐ やや難しい
- ☐ 普通
- ☐ かなり難しい
- ☐ 非常に難しい

53. 日本人とトラブルが発生した際に適切に対応することはどの程度難しいですか？【単一選択】

- ☐ 全く難しくない
- ☐ やや難しい
- ☐ 普通
- ☐ かなり難しい
- ☐ 非常に難しい

54. 日本のジョークやユーモアを理解することはどの程度難しいですか？【単一選択】

- ☐ 全く難しくない
- ☐ やや難しい
- ☐ 普通
- ☐ かなり難しい
- ☐ 非常に難しい

55. 日本の住宅環境に適応することはどの程度難しいですか？【単一選択】

- ☐ 全く難しくない
- ☐ やや難しい
- ☐ 普通
- ☐ かなり難しい
- ☐ 非常に難しい

56. 社交イベントやパーティー、式典に参加することはどの程度難しいですか？【単一選択】

- ☐ 全く難しくない

- ☐ やや難しい
- ☐ 普通
- ☐ かなり難しい
- ☐ 非常に難しい

57. 日本のテレビ番組や新聞を理解することはどの程度難しいですか？【単一選択】

- ☐ 全く難しくない
- ☐ やや難しい
- ☐ 普通
- ☐ かなり難しい
- ☐ 非常に難しい

58. 中日文化の違いを理解することはどの程度難しいですか？【単一選択】

- ☐ 全く難しくない
- ☐ やや難しい
- ☐ 普通
- ☐ かなり難しい
- ☐ 非常に難しい

59. 不満のあるサービスを適切に処理することはどの程度難しいですか？【単一選択】

- ☐ 全く難しくない
- ☐ やや難しい
- ☐ 普通
- ☐ かなり難しい
- ☐ 非常に難しい

60. 病院や薬局のサービスを利用することはどの程度難しいですか？【単一選択】

- ☐ 全く難しくない
- ☐ やや難しい
- ☐ 普通
- ☐ かなり難しい
- ☐ 非常に難しい

61. 日本のゴミの分別・処理方法に適応することはどの程度難しいですか？【単一選択】

- ☐ 全く難しくない

- ☐ やや難しい
- ☐ 普通
- ☐ かなり難しい
- ☐ 非常に難しい

62. 道に迷わず移動することができますか？【単一選択】

- ☐ 全く難しくない
- ☐ やや難しい
- ☐ 普通
- ☐ かなり難しい
- ☐ 非常に難しい

63. 日本の政治制度を理解することはどの程度難しいですか？【単一選択】

- ☐ 全く難しくない
- ☐ やや難しい
- ☐ 普通
- ☐ かなり難しい
- ☐ 非常に難しい

64. 日本人のコミュニケーションスタイルを理解することはどの程度難しいですか？【単一選択】

- ☐ 全く難しくない
- ☐ やや難しい
- ☐ 普通
- ☐ かなり難しい
- ☐ 非常に難しい

65. 日本の気候に適応することはどの程度難しいですか？【単一選択】

- ☐ 全く難しくない
- ☐ やや難しい
- ☐ 普通
- ☐ かなり難しい
- ☐ 非常に難しい

66. 日本の娯楽や余暇の過ごし方に適応することはどの程度難しいですか？【単一選択】

- ☐ 全く難しくない
- ☐ やや難しい
- ☐ 普通
- ☐ かなり難しい
- ☐ 非常に難しい

67. 家族と離れ、日本で独立して生活することはどの程度難しいですか？【単一選択】

- ☐ 全く難しくない
- ☐ やや難しい
- ☐ 普通
- ☐ かなり難しい
- ☐ 非常に難しい

68. 日本の生活リズムに適応することはどの程度難しいですか？【単一選択】

- ☐ 全く難しくない
- ☐ やや難しい
- ☐ 普通
- ☐ かなり難しい
- ☐ 非常に難しい

69. 注意力の確認テスト：必ず「かなり難しい」を選択してください。【単一選択】

- ☐ 全く難しくない
- ☐ やや難しい
- ☐ 普通
- ☐ かなり難しい
- ☐ 非常に難しい

70. アルバイト（パートタイムジョブ）の環境に適応することはどの程度難しいですか？【単一選択】

- ☐ 全く難しくない
- ☐ やや難しい
- ☐ 普通
- ☐ かなり難しい
- ☐ 非常に難しい

71. 日常生活において、日本語を使って問題なくコミュニケーションをとることはどの程度難しいですか？【単一選択】

- ☐ 全く難しくない
- ☐ やや難しい
- ☐ 普通
- ☐ かなり難しい
- ☐ 非常に難しい

72. 日本の方言や独特な言い回しを理解することはどの程度難しいですか？【単一選択】

- ☐ 全く難しくない
- ☐ やや難しい
- ☐ 普通
- ☐ かなり難しい
- ☐ 非常に難しい

73. 日本のマナーや礼儀作法に適応することはどの程度難しいですか？【単一選択】

- ☐ 全く難しくない
- ☐ やや難しい
- ☐ 普通
- ☐ かなり難しい
- ☐ 非常に難しい

74. 日本の人口密度の高さに適応することはどの程度難しいですか？【単一選択】

- ☐ 全く難しくない
- ☐ やや難しい
- ☐ 普通
- ☐ かなり難しい
- ☐ 非常に難しい

IV. 社会関係資本の測定（24 問）

次に、日本で親しく付き合っている中国人の友人やクラスメートとの交流についてお答えください。（12 問）

75. 一般的に、ほとんどの人を信頼できると思いますか？【単一選択】

- ☐ はい
- ☐ いいえ

76. 最も親しいグループや組織に温かみを感じますか？【単一選択】

- ☐ はい
- ☐ いいえ

77. 周囲の人々が自分と利益を争っていると感じますか？【単一選択】

- ☐ はい
- ☐ いいえ

78. 困った時、周囲の人は助けてくれると思いますか？【単一選択】

- ☐ はい
- ☐ いいえ

79. 過去1年間で、他の人と一緒にレストランやカフェに行くことがありましたか？【単一選択】

- ☐ 一度もない
- ☐ 1～3回
- ☐ 3回以上

80. 過去1年間で、所属する組織（学校、コミュニティなど）が主催するレクリエーション活動に参加したことがありますか？【単一選択】

- ☐ 一度もない
- ☐ 1～3回
- ☐ 3回以上

81. 過去1年間で、ボランティア活動に参加したことがありますか？【単一選択】

- ☐ 一度もない
- ☐ 1～3回
- ☐ 3回以上

82. 親しい友人がいますか？【単一選択】

- ☐ いない

- ☐ 1 人
- ☐ 2 人
- ☐ 3 人以上

83. 信頼できる同僚がいますか？【単一選択】

- ☐ いない
- ☐ 1 人
- ☐ 2 人
- ☐ 3 人以上

84. お互いに助け合える近所の知人がいますか？【単一選択】

- ☐ いない
- ☐ 1 人
- ☐ 2 人
- ☐ 3 人以上

85. 定期的に連絡を取り合い、励まし合う親戚がいますか？【単一選択】

- ☐ いない
- ☐ 1 人
- ☐ 2 人
- ☐ 3 人以上

86. 一緒に何かを協力して行うパートナーがいますか？【単一選択】

- ☐ いない
- ☐ 1 人
- ☐ 2 人
- ☐ 3 人以上

次に、日本で付き合いのある日本人の友人やクラスメートとの交流について同じ質問にお答えください。（12 問）

87. 一般的に、ほとんどの人を信頼できると思いますか？【単一選択】

- ☐ はい
- ☐ いいえ

88. 最も親しいグループや組織に温かみを感じますか？【単一選択】

- ☐ はい
- ☐ いいえ

89. 周囲の人々が自分と利益を争っていると感じますか？【単一選択】

- ☐ はい
- ☐ いいえ

90. 困った時、周囲の人は助けてくれると思いますか？【単一選択】

- ☐ はい
- ☐ いいえ

91. 過去1年間で、他の人と一緒にレストランやカフェに行くことがありましたか？【単一選択】

- ☐ 一度もない
- ☐ 1～3回
- ☐ 3回以上

92. 過去1年間で、所属する組織（学校、コミュニティなど）が主催するレクリエーション活動に参加したことがありますか？【単一選択】

- ☐ 一度もない
- ☐ 1～3回
- ☐ 3回以上

93. 過去1年間で、ボランティア活動に参加したことがありますか？【単一選択】

- ☐ 一度もない
- ☐ 1～3回
- ☐ 3回以上

94. 親しい友人がいますか？【単一選択】

- ☐ いない
- ☐ 1人
- ☐ 2人
- ☐ 3人以上

95. 信頼できる同僚がいますか？【単一選択】

- ☐ いない
- ☐ 1 人
- ☐ 2 人
- ☐ 3 人以上

96. お互いに助け合える近所の知人がいますか？【単一選択】

- ☐ いない
- ☐ 1 人
- ☐ 2 人
- ☐ 3 人以上

97. 定期的に連絡を取り合い、励まし合う親戚がいますか？【単一選択】

- ☐ いない
- ☐ 1 人
- ☐ 2 人
- ☐ 3 人以上

98. 一緒に何かを協力して行うパートナーがいますか？【単一選択】

- ☐ いない
- ☐ 1 人
- ☐ 2 人
- ☐ 3 人以上

付録2 インタビュー質問内容

Q：日本人の友人を作ったことがありますか？その関係は継続していますか？もし継続していない場合、その理由は何だと考えますか？

Q：日本人と友人になることは難しいと感じますか？また、友人を作るためにどのような会話をすればよいか分かりますか？

Q：日本での留学生活において、日本人の友人を多く作るべきだと思いますか？その理由は何ですか？

Q：日本人と友人関係を築き、それを維持する上で最も困難だと感じるのはどのような点ですか？

Q：どのような方法で新しい友人と出会うことが多いですか？

Q：日本での交友関係は主にどのような人々と構成されていますか？

Q：何らかの組織（サークル、クラブ、学生団体など）に参加したことがありますか？その活動をどのくらい継続しましたか？また、組織との交流頻度はどの程度ですか？交流頻度が低い場合、その理由は何ですか？

Q：組織に参加することは困難だと感じましたか？また、実際に行動を起こすのは難しかったですか？

Q：日本社会をより深く理解するために、様々なサークルや団体に参加するべきだと思いますか？

Q：組織に参加し、人間関係を維持しながら継続的な支援を受ける上で最も困難だと感じる点は何ですか？

Q：異文化交流において、特に困難に感じた具体的な経験を一つ教えてください。また、その困難にどのように対処しましたか？

Q：そのような経験は、ご自身の成長や日本での適応にどのような影響を与えたと考えますか？

Q：中国人留学生在日本での生活や学習に適応するために、どのような支援やリソースが役立つと考えますか？

Q：今後日本に留学を予定している中国人学生に対して、どのようなアドバイスを伝えたいですか？